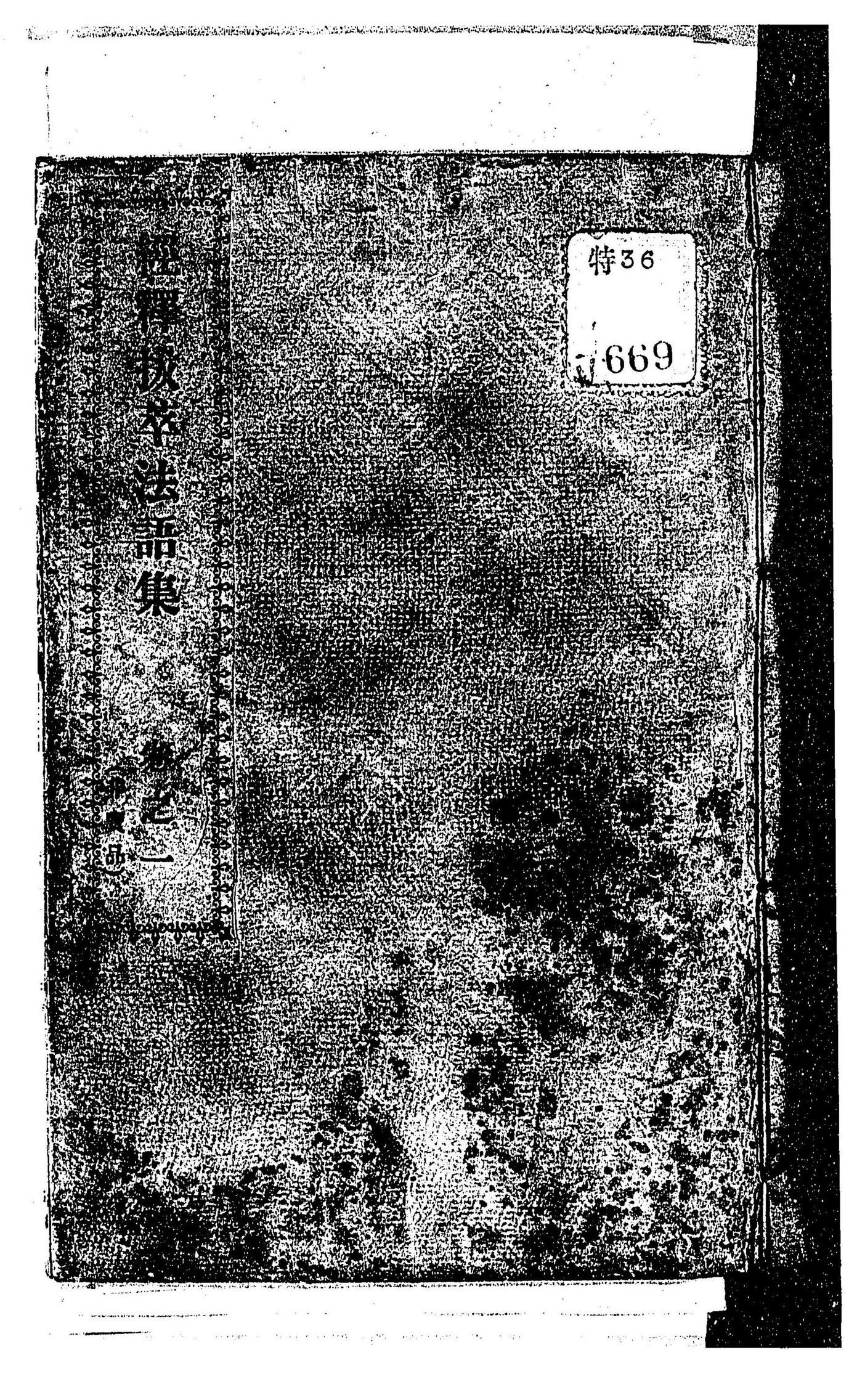


特36
669

017630-001-0

特36-669

経釈抜萃法語集

小川　独笑／著

M35

ABF-0488

一加葉白ス如来ハ无心无識ニシテ衆生ヲ利益ス
云ハ未世ノ衆生ハ疑ヲ生セシカト佛言ノ天地草
木ハ无心无識ナリ花実ノ利益ヲ人ニ與フ佛
亦如是トヒ上
一紙数ハ无心无識ノ紙ト文字ナリ紙ト文字
ノ无心无識ニシテ不可思議ノ利益ヲ衆
生ニ與ヘタマフ

一入涅般後ハ経ニ事フコト、我ニ事フ如ノセヨ
経即我ナリト吉玉
一然レハ経即佛ナリ宗師遺教文ハ即宗師ナ
リ同ク无心无識ノ紙ト文字ナリ无心无識ノ
紙ト文字ハ貴重ナル哉无心无識ノ紙ト
文字人ニ利益ヲ與フルコトお言ヘカラス
但経典ハ乱道ノ原ナリトノ経文モ
アリテス　夕照山人

御和讃ニ云
専修ノヒトヲ
ホムルニハ千
無一失トオシ
ヘタリ雑修ノ
ヒトヲキ
ラフニハ
萬不一生
トノヘタ
マフ

小川獨笑居士の肖像

老窮命且夕ニアリ念佛ノ外一念モ此世界ニトヽムルナシ
性来ノ筆癖アリ見聞コトニ発動心ノ時ヽ之ヲ記
ス錯乱順序ナリ重復脱漏ヲカヘリミス積テ堆キ
ハ拾ヒ集テ箱底ニ埋葬ス更ニ他見ヲ要セス多〳〵
扎〳〵ニ散在スル一片アリ御同朋諸士ノ需ニ應ス
再閲ヲ予ニ求ム若シ予存命中ヲ期スルモノニアラス
サレハ今日ヲ以テ予ノ死後自ト認メ拔鈔取捨御随
意自在ニ付任ス予今數百千年前ノ人ヲ取捨考
ヨリ數百千歳後ノ人ノ予ヲ取捨スルヲ待ツ帰謗ハ同
種人應ノ念〻生滅片〻痛痒ニ関アラスシテ、コヽモ
コトハモタ〳〵ハ不可思議尊ニ帰命シオハランノミソラ
コトタハコト同ク知ス相見テ誰カ微笑スアナカシコ〳〵
南无阿弥陀佛

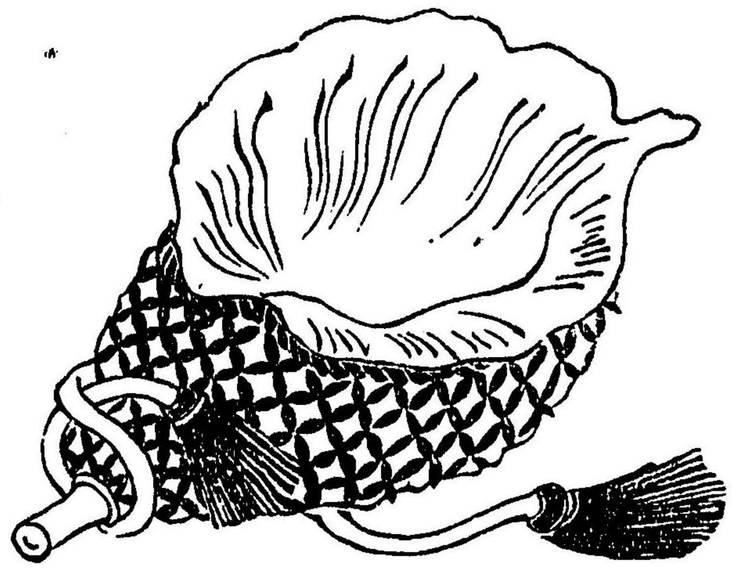
明治三十五年三月

小川独笑 六十九才

ほらがいの
かすかなる音も
いつるなり
我ぬけ
かくハ
後の吹くむ

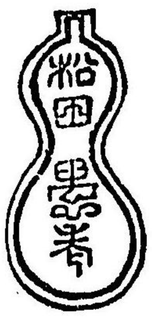
明治三十五年二月　夕照山招提

六十九才



目次

我はたゞ御名吹たつる
　ばかりにて
三世にひゞく
　洞かひの聲
一聲は微塵世界に
　なりわたる
御名をこ聞ば
　憚りもせず
南無阿彌陀佛



六十五才

經釋拔萃法語集總目次

卷之壹目次

◎說聽者の心得　一
◎佛法は述て作らず　二
◎念佛同明者相談の順序　八
◎專修專念の外相　二八
◎四十八手の奥の手談　三二
◎悲歎述懷追悼　五六
◎自然法爾の說　五九
◎どうも妙なこと　六三

卷之二目次

◎温古知新
◎聞法信心宿緣による
◎眞成報佛恩
◎御文のこゝろを寫す
◎法然佛は無智者なるや
◎文を以て文を破る事
◎某僧と談話す
◎欣淨厭穢の事
◎くりごと
◎正信偈拔萃
◎一人の爲なりとの事
◎佛恩報謝の事
◎釋迦は要門云々の事
◎御文章拔萃
◎一見二見の事
◎西方往生記

卷之三目次

◎應病與藥の文
◎不知の文
◎大小乘略節

◎專修雜修の分際
◎專修の一證
◎佛說大略
◎相應不相應
◎專修專念の外相
◎顚倒を憐む
◎遠く宿緣を慶ぶ
◎讀經宿緣
◎決定信の對物
◎說聽實試一片
◎信心の事
◎得果の相違
◎宿業の事

卷之四目次

◎懺悔
◎たはごとのくりごと
◎慚愧の事
◎教人信の端初
◎信心を取に二種あり
◎如實修行の事
◎信心の事
◎決心の事
◎淨土宗某氏に與
◎魔男之事
◎恭敬の心に住する事

卷之五目次

◎開祖に順する事
◎世間流と正理順の姿
◎自心を試む事
◎信心話し
◎自力法他力法の別
◎信心正因稱名報恩
◎佛門初入問答
◎念佛精進の事
◎信と疑
◎過去宿緣
◎世間風俗一節の一
◎同　上　の　二
◎禪僧と談話す

◎十六羅漢の事
◎一休師所縁の事

卷之六目次

◎白痴說
◎業識所見
◎是非しらぬ事
◎自信教人信
◎教者平等心に住す
◎聞者平等心に住す
◎念佛者尊敬の事
◎仰信解信
◎菩薩藏品
◎信心を身に保つ事
◎教人信の事
◎三　譬
◎諸山比較の事
◎黑の黑谷

卷之十目次

◎問　答　記
◎一身出離の用意
◎念佛往生の信
◎讀聖教の目鑑
◎正法護持の大畧
◎後の人に賀す
◎讀書の一法
◎秘密の大畧
◎うさ事そら事

卷之七目次

◎信心問答
◎同　自等一段至第八段
◎同　追加
◎附　錄
◎如是我聞

卷之八目次

◎正教の文章に就て
◎稱　名　相續の心得
◎妄想分別
◎讀者の業識
◎初入者對談記
◎友同行の辨

卷之十一目次

◎讀者所見區々の事
◎信受報謝の辨
◎學問は信心の助業
◎藏經拜閲の事
◎獨り居て悅ぶ事
◎稱　名　動修の証文
◎言說偏執の事
◎西方に心をとゞむ
◎二大師判決談
◎貪欲の前後
◎信心相承の文証
◎蟬　吟
◎解信一助の事
◎自心料簡
◎宿善によるとの事
◎面白き事
◎信佛語を得益とす

卷之九目次

◎佛法原則畧記
◎難受難聞の畧鈔
◎易往難信の事
◎御和讃の文に就て
◎佛恩報謝云々の事
◎信者の心得
◎寺參詣兎や角に對言
◎七ヶ條の文
◎釋迦要門の事
◎信後の威相
◎世間實相
◎過去宿縁の事

卷之十二目次

◎見眞大師序文
◎信心の事
◎佛恩報謝の事
◎法然聖人の文
◎經　釋　如是我聞
◎開山聖人の文

◎攝取の事
◎蓮如聖人の文
◎信心略鈔
◎報恩略鈔
◎臨　終
◎自信教人信の事
◎取易き信心の事
◎難信に就て
◎難々大略鈔
◎述　懷
◎共に尊敬すべき事
◎名　利
◎如是我聞
◎付　錄
◎ありのまゝ
◎佛法初入心得

●卷之十三目次

◎信力の事
◎わが機
◎能所一相の略
◎御文章は常教と云事
◎智惠比較の事
◎業識所見
◎甲乙爭論
◎追　加
◎甲乙の判說
◎取易き云々の事

●卷之十四目次

◎佛法大意談
◎現世差別道
◎大乘本生心地觀經
◎妙法聖念處經
◎增一阿含經
◎佛說玉耶經
◎佛說阿遊達經
◎佛說善生子經
◎朋友の事
◎阿彌陀過度人道經
◎淸淨經
◎三分阿摩晝經
◎佛說六方禮經
◎佛說梵志阿颰經
◎佛說羅摩伽經
◎阿蒐夷經
◎成具光明定意經
◎別譯阿含經
◎別譯雜阿含經
◎分別善惡所起經
◎雜寶藏經
◎佛說未羅經
◎佛說孛經
◎佛說醫喩經
◎佛說佛醫經
◎溫室洗浴衆僧經
◎梵網經
◎文殊師利問經
◎優婆塞經
◎摩訶僧祇律
◎優塞戒經
◎優婆塞受戒品
◎佛名經　畧記
◎增一阿含經
◎佛藏經
◎五苦章句經
◎大般若經
◎月燈三昧經
◎寶積經
◎如來不思議境界經
◎閑居經
◎阿含經
◎諸經說法式略鈔
◎說聽心得

●卷之十五目次

◎讚經所感
◎淨土眞宗問答記
◎三大師の御詠歌
◎二人疑論
◎四海兄弟結約の事
◎深信の心相

◎世界無常の辨
◎一切言說そらごと
◎神さま自分さま
◎福田老僧難問答書

●卷之十六目次

◎尊號眞像銘文抜抄
◎一念多念鉦文同
◎末燈鈔　同
◎御消息集　同
◎口傳鈔　同
◎執持鈔　同
◎最要鈔　同
◎改邪鈔　同
◎歎異鈔　同
◎持名鈔　同
◎淨土眞要鈔　同
◎諸神本懷集　同
◎破顯邪正鈔　同

●卷之十七目次

◎佛敎大意演說
◎某と茶話記
◎時機の辨
◎附錄
◎十七旁陀羅の事
◎天眼鏡
◎佛眼鏡
◎經濟法
◎愧上憐下
◎妙談を聞まゝ
◎天神論
◎世界一見譚
◎讀書の一法
◎藏經拜閱の事

經釋抜萃法語集自卷之壹至卷之十七總目次終

但し本書は小川居士の校閲を得たる者に非らざれば其誤字等は筆記者の誤りと御心得相成度候

小川獨笑居士述

◎說聽者の心得

一句の法文を云はんとするときは先づ自身の一大事の後生と思ふ心をこし○次に聞きがたき法を聞くと思ふ念をおこし○次に聽く人方を尊敬する心をおこして後に法文を申せとは佛說てあります

一又聽く人も後生の一大事と思ふ心をおこし○次に聞かたき法を今聞くと思ふ心をおこし○次に說く人を尊敬する心をおこして互に尊敬心をおこして相談す

べしと説れてあります

一されば我説き聞かせ申すと云心にて語るときは聞く人の心に留らずと申します

一又此人の言を聞くと云ふ心にて聞くときは決定の信はあられぬと説れます

一説く人も聞く人も同く佛説を聞くと云ふ心を以て説き以て聞くときは決定信を得ると説れます○御同朋御同行どかしつきてと仰せられけりと申すは此ことはりてあります

一以上の心を以て説き以て聞かざる人は諸佛の法を尊敬せざる人なれは菩提をはかたるべからずと説れます○諸佛如來の仰を聞て決定心を得たいと云ふ心のなきは如來さまを尊敬せずと申すなり

一佛法聽聞の心ある人には過去世に見諸佛の人々なれば佛説のまゝを説くときは決定す若し雜言すれば宿世に聞かざる言なれば多く聞ても決定せぬと説れます正信偈御和讃御文章は佛説のまゝでありますもまぜてない

◎佛法は述て作らず

一聖者の言は佛説と信ず可しと説れたり此義は姑く略す

一蓮如佛は主として開山聖人云々我聖人云々を以て主

義とす

一親鸞佛は本師云々七高僧の說を信ずべし云々を主とす

一七高僧は釋迦佛云々佛說云々信ずべし云々を主とす

一釋迦如來は阿彌陀如來云々信ずべしと說くを主とす

一これを一應の義とす述て作らずと云これなりと聖者七高僧各々相承師の所說を述べて師說を證明する爲に佛說諸經の文を引證して相承の師說の佛說なることを明らかにす、これを述べて作らず私に作らざるを證明すと云これなり

一御こことはのことふりを申し御ことばをよみ候へは聞く人信をうるなりと此御文の心こそ述べて作らずとの心なり私しを云はずとの心なり

一自身のよろこびのあまりを人に申すなりと仰ありきこれなり

一よろこびのあまりと云は蓮如樣は予が安心の一途は一念發起平生業成の宗旨に於は今一定の間佛恩報盡の稱名は行住坐臥にわすれざること間斷なしと○自信をのべてこの信心をば開山聖人の仰に、かよふ〳〵に仰られたるをきゝて○此信を得たりと申すゆへに開山聖人云々聖人云々と頻りに聖人一流云々と御開山の仰せを申す○かよふに聖人の仰をきゝて今は一

定して念佛を申すなりと其信心をこりたるの手つゞきを申す、これをよろこびのあまりを人にも申すこと

○依て經文釋文を引て聖人の言は佛說なるを證明す及び述て作らざるを證す

一御開山樣はよき人の仰せを信ずるばかりなりと自信を述べたまひて此信心をば本師源空いまさずは云々

○又无上の信心おしへてぞ云々○又はたしかにきゝて候と信心をとりたる前後をのべて本師の御心にそむく云々としてさらに經釋の文を引て本師の言は私にあらずと明證す○述て自ら作らざるを證したまふ

一法然樣は善導の遺教によて信心決定すこたゝ善導の

遺教を信するのみにあらず、此善導の遺教こそ西方阿彌陀佛の願に順するなれと自信を示し信心を取るの前後を述べて經釋を引て善導の遺教こそは佛說なりと私を加へざるを示し若し難ずるものは釋迦善導を難ずべしと私なきを證す乃至述て自ら作らずと證したまふ

一善導樣は經文を釋し終に佛證を乞て私しに作らず佛の正意をあらはすと示し述べて自ら作らざるを證したまふ

一釋迦如來樣は衆生の疑を除かん爲めに神通力を以て阿彌陀如來を此娑婆世界に示現をあらはして佛の所說の私に作らず在來の法を述ると示し、終に阿彌陀如來此世に現れたまふの法を說玉ふ、今その見佛の法を存す○今現に阿彌陀佛を見んと願ふ人は法の如く修行すれば必ず拜見を得るは必然なり、佛說虛妄なし釋迦如來樣も述べて私に作らざる明證したまふ

一佛法は佛及聖者各々述べて私に作らず聖教のとふりを申し聖教をよみ候へばきく人信をとるなりと云とれなりとす又よろこびのあまりを人にも申すと云とれなりとす

一よろこびのあまりとはかようく の佛說かよふく の師教の文によて今は信心決定して專修念佛する身

となりたりと、その佛説や師教の文及び口授等を述るをよろこびのあまりを人にも申すと承る

一かよふに佛及聖者の一句半言も私を作らず各々相承の師旨を述て遺訓したまうこれを佛法は述て作らずとす

一かよふに自身のよろこびのあまりを申さばいかほど多く申すもあやまりあらずたゞ自身のことを申すばかりなればなり或は自信を述べて證としては經釋の文を申すことなりと承る

一或はこのあまりを申すを聞て同心一味に住する人を見ることもあればこれを教人信の義にも相應ずとしめし玉ふとす

一以上略記おもふほどは筆に登す能はず、あなかしこあなかしこ

一法は一法七百年來今日まで相承する法はさらにかわることなし只法器をこると取らざるとの相違のみ故に今の法者淨土眞宗道俗宗師の遺訓を奉ずといへども宗師に似ざるところあるは法器の沙汰せざるが故なり

一宗師に三義あり一は法器二は法三は義（但し義の説はこゝに記すは一應の義のみ讀者恕せよ）今や法の一を傳承して法器と義との二つのものを沙汰し修せざるもの多し法器を取らざる故に

名利の嚴戒嚴禁を恐れず義に依らざる故に專修專念に住せず、但し盛者必衰は通理なり法亦盛衰なからんや、佛深く說れたり、日本佛者古に比すれば弊多しこれども今より千年の後にして今日の佛者を見れば今日にして千年の古への佛者を見る如く轉倒するは佛說に明かなり、今より後千年の佛者道俗を思へば今の道俗は上等の樣なり

一こゝに記すは忠心藏の淨瑠璃本を作るが如し、それは忠臣藏を語る太夫も忠臣とならず、踊る役者も忠臣とならざる如し○佛說を云ふも聖者にもならず太夫も役者も藏之助とならざる如く說くも聽くも同く宗師の如くならず只語るのみ踊るのみ只說くのみ只聽くのみさればたはごとなりそらごとなりおかしく〳〵

但藏之助の墓を見て割腹するもあり。されば雜修名利の腹を截るなしと必すべからず名利の腹を切れはあとは專修なり

一判官殿九寸五分と云を以てひやと腹につき立て十文字にかきゝり藏之助に渡す一言は芝居眞似ごはいへども心ある人は涙を含みひや已れと思ふ感發心を動さゞるは少なしされども芝居木戸を出れば何の利益もなし是ゆへに宗師佛云一念ごは觀想功德遍數等の一念を云ふにはあらず往生の心行獲得する時節の極促について一念ごは云ふなりと

一然れば一時の說法を聞くごきひやと感じ涙を流すも一念と云ふにはあらず是は九寸五分の一言を見聞してひやの感を起すの比か然れはこゝに記すも或は一讀しひやの感を起すもの全ぐなしごは必すべからず若したま〳〵ひやの感を起すもよみおはれは芝居の木戸を出るが如し何の利もなく何の益もなし无形心識の發動忘想分別たることなれはなり但しそらごごたはごとを見聞中亦利益あるもはかるべからず

◎念佛同朋者相談の順序

一佛說に言佛法相談の時經釋の文を順次に引證せよごこ此順次は一にあらず時と人ごの機に應ずるの細目あり略すこゝに記すは其一片なり

一一人遠方より聞法の爲め態々訪來るあり是は无學文盲にして是迄聽法を重ねたるも決定の信心に住せざる者なり

初言

一先遠來を謝し其勞を慰む次に職業何れを尋ね家内幾人あるやを尋ね一家の閑なるや忙しきやをたづね是迄の聞法の次第を聞き何ゆへに今日尋ね來るやの順次を問ひ此人の住するところの人機をよく心うるが爲めにこれを尋ぬ是は善戒經に佛說き示したまふに眞順して佛說の如く相談するの順序なり

但來者の心大同小異あり區々无量なり其一二に云く或は往生の決心なきを以て心苦のあまりに來るあり○亦いかなる法語あるや試に聞んとするあり○或は人の教へに依て來るもあり○或は不審を問はんとするもあり其數無量なり

一何れといへども未來世に趣ぐの法門を聽んとするは一同なり

一さては未來世のことを決定せんと態々尋ね來りたまふはありがたく亦めでたき御事にぞあるべけれと

一次に來世に趣くことに於ては予はさらに存したることとなし、只佛語宗師の教へに順して念佛するばかりに候

一予の存ぜざると云ふも佛の教を聞て今は存んぜぬと申すなり、それは予は自身の生れ來るの過去を知らず何日に死していかなるやを知らず、亦親戚六十人の多

き目の前に死去すこいへども今に一人も音信もなく
たよりもなし、其中には親もあり子もあります○亦佛
法をよろこび〳〵死するもあり○亦さもなく死する
あり同くたよりもおとづれもありませぬ○そこで我
身の來るも去るも知らざるものにて況んや未來世の
ことといがゞしてよきやさら〳〵存んぜずと申すばか
りであります○そこで未來世のことは是非も邪正も
わきまへざるものであります、是も佛の教へ師の教に
よりてこのこふりの心になりました○此よふに音
信もなき未來世に我も死して今にもゆかねばならぬ
ゆへに我身には中々一大事であります

一御方にも親類多少死なれて。ありませう、たよりはあり
ますまひ○亦自身の生れ來る過去、死ぬる何日と身の
果はしられますまい、我と同よふでありませう。いかに
學問しても聽聞しても未來は見へませぬと承ります
一過去を見る法は佛の說きおかれてあれども修行がで
きませぬゆへに我らは及ばぬことであります
一されば未來世の信心をいかゞしてよきやら知らざる
ことは御方と我と少しもかはりのないことは是で分
ります。いかゞでありますや○此ごき先方云されば未
來世のわからぬは我も御方も同じと云ことは分りま
したと云

一御方と我とは同じ盲目なり○盲目が盲目に道をたづねるは尋ぬるも馬鹿らしい○亦盲目か人に教るも馬鹿らしいはしれたことであり今は我も盲目なり○御方も盲目なり○されば我に問ふはむだであります○亦我おしふるとするも亦むだであります

一御方と我と同く未來世はわからぬと云ことはしれました然るに御方も我と同く死ることは死ると承知である○そこで御相談を申すのであるいよ〳〵佛說を聞て信じて死にませうではないかと御相談を申すのであるいよ〳〵佛說を聞て信じて死にませうと約束がきまれば我の佛說宗師の教へを聞て信じて念佛を申して居ることの其佛說宗師の教へたまふ御經宗師の文を讀みませう

一佛說と宗師の教のとふり信んずれば今日決定の信心に住することを得ると申すことでありますからさよふに承知をされ其決定の信心を今日得ると申す其譯をば一々申しませう御方の心に合せて見なされませよ

それは〳〵他力の易き亦如來樣の御恩の深きことは御互にわかることでありませぬ

一如來さまの仰を聞くとすれば先づ今日御方が御法を聞きたいと思ひ立たるは何のゆへぞと其思ひ立たる

わけを說たまふに其わけは過去前生の中に如來さまの善巧方便によりて御法を聞かせてもらひたるの宿緣によりて今日聞こふと思ふの一念はおこりたりと說れます、熙連河と云河の砂の數ほどの多き數の諸佛を前生の時拜みたる因緣あるの人にして今此世に生れ來て漸く謗らぬ位になると寶積經にとかれてあります、そこで大經に此ことを宿世見諸佛樂聽如是經と說れてあります、とふしても前生のときの因緣佛恩を蒙り濡紙を干す如くにそろ〳〵と前世に生をかへ生をかへする問に御方便の御緣を蒙り重ね〳〵て其重ねたることをこと〴〵くを一々申せば一刧中說もつくされずと申します、さよふに佛恩を蒙りたるの因緣を重ねて下されたることの積て今日聞きたいと云ふ一念の心をおこされたると申すは佛說であります

○されば御方の今日聞きたいと思ふ心のおこりたるわけは今申すことふりにておこられたりとは佛說でありますさよふに宿世に如來さまの御恩を蒙りてのゆへに此法を一念聞く心をおこす身となられたる人々には自身を大切に思へと說てあります、佛說を信んずるとすれば是か佛說であります

そこで御開山さまの仰にたま〳〵行信をゝば遠く宿緣を慶べと宿緣の佛恩を蒙らざれば信んぜられぬこ

申すことをおしへたまふも此ことはりでおります
一さように宿縁を蒙りて今聞くゆへに今は何のぞふさ
もなく何の苦ろふもなくに信心をうると申します
一信心の易いと云ふも○こりやすの安心と申すも○ゆ
きやすの浄土やと申すも○此宿縁の重なりて下ださ
れたるゆへに易いと申すことでありまず○そこで此
宿縁なき人は此信をうることの難くむつかしきこと
は御経には大千世界を毛一本にてつきあくるよりも
かたしと申します○亦此宿縁なき人はたとひ千万億
の諸佛あらはれて圓て光明を目の前に照しても此人
は御方の今日のよふに聞こふと思ふ心はできぬ亦本

とは思はぬ是は生々世々の過去世よりの罪根重りて岩の如く其身を圍ふてあれば佛力も及ばぬと章苦經に說てあります是を邪見憍慢の惡衆生信樂執持甚以難難中之難无過之難と御正信偈にもあらはしたまふは此ことであります

一そこで佛語師說を信んずるとすれば是は佛語師語でありまず我はいよ〳〵未來のことは分らぬと信じたれば今は此佛說を本と信じて少しも疑ふ心はありませぬ御方も此佛說を信じてはいかゞや

一同じ人間にて御方や我は此佛語を信ずるに彼は未來世はない六道もない誰さへ見た者もない便も音信も

ない故に信ぜず本と思わずと云て信んぜぬ人もあり我は便も音信もなく誰さへ見た者もない故に此佛語を信ずるなりと申す されば彼は宿緣に逢はず御方と我とは宿緣を蒙りたるの證據とおもいます彼人を御方や我の如く信んぜしめんとすれば前に述る如くにむつかしきことであると申します これで易いとむつかしきとの二つはよくわかります

一そこで求る心のおこりたる人は十人は十人ながらに往生の信心はにらると申します是より其易いと云證據を申します但し佛說を今少し申すことあり佛言く信心決定を欲する者は自心に如來と信ずる人を師と

して聞法すれば決定信心を得るとのことであります其佛説を信じて行したるは親鸞佛御開山である御和讃に阿彌陀如來化してこそ本師源空云々とこれであります阿彌陀如來と信んずるゆへに師とし聞法する、これこそは諸佛如來の眞説に信順すると一つである、されば御方も佛と信ずる人あらば師として聞くがよろしい、我も此佛説によりて諸方の佛師を見るに佛如來とは中々信ずる心おこらず、學者とは信ずれども如來とは思はれざるなり、よつて今は師を古に求めて得られました、それは　蓮如親鸞法然善導の四大師を我は如來と信ずる故に今は四大師を未來世に向ふの師匠と決定しました、御方も此四大師を如來さまと信ずるならば往生の師匠と定めてはいかゞやと曰く四大師を師匠と定むる可しと云、されば師匠と定めたる上は一言半句も加へず減ぜず、師の言は即ち佛の直説なりと信んぜよと釋迦如來さまはとかれたり、されば此れより其師匠の正教の文を讀で易と云ふ證文を申しませう

一阿彌陀如來なりと師匠を信ずるゆへに其法を聞て信じたるこゝろを御開山樣はこのよふにあらはして見せてあります、念佛はまことに淨土のたねにやはんべらん、亦地獄の業にてやはんべらん、そふじて以て存

知せざるなり、たとひ法然聖人にすかされたてまつりて我念佛を申して地獄におちたりともさらに後悔すべからず云々、亦は。もし惡道へゆかばひとりゆく可からず、師と〻もに行く可し、これは人に依て信を立ること申すことであるこれは師を如來と信んずるゆへにかよふに決定心をおこしたまふと知られます、我も師を如來と信ずる故に此思に住し師の言に少しも違ひ申さず、されば師の易いと仰せのことをならべて申しませう

一先づ近く、蓮如さまは何の造作もなく何の苦勞もいらず、あらこりやすの安心や、あら往き易の淨土や、亦これを經には易往而无人と說かれたり、この文のこゝろはこりやすき安心をとる人まれなれば淨土には往き易くして人なしと云文のこゝろなりと淨土の往生はうたがひなく思ふてよろこぶこゝろなりと云々、これは易しと云證文なり

一御開山の仰せには易は信心なり難は疑情なり、亦易は如來願力廻向之心と、難は三業修善不眞實の心と、亦は一文不知の經釋のゆくちもしらざらん者のためやすからん爲めの名號にておはします故に易行とは云なりこれは易しと云證文なり、此外今略します

一法然さまの仰せに念佛往生の旨をふかくもかたくも

申さん人はつや〳〵本願の底をしらざる人と。こゝろふべしと同く易しと云證文なり外畧す

一善導和尚は十聲一聲佛の願力を以て皆往かざるはなし、故に易しと名くと是も易しとの證文なり外畧す

一釋迦如來さま目連所問經に說きたまふ阿彌陀佛國往易く取易し、信心を修せずして外道に事る是は无眼人无耳人と名くと、是を御和讃に大聖易往と說きたまふ淨土をうたがふ行人をば无眼人とぞ名づけてぞ无耳人とぞ述べたまふと證したまふ

以上易しとの文の證據なり多く文の證據あれども今こゝに一二を申すもこのことふりであります

一此外七十余經の多きありて御阿彌陀如來の西方淨土に往き易き經文あります

此證據の文は釋迦如來さまの說きたまふ經典なれば佛說のまゝを述べたまうゆへに四大師も同く易い易と敎へられますことは今申すことふりであります、以上は佛說と宗師の述べたまふことはしられます、佛語を信ずるとの心ならば此易いと云ふはほんまのことであります

但し世間にむつかしきことを好む人が多い、此人易いと云をきゝいて云ふ御文に凡夫たすかることたゞ易しとばかりおもへりとの文ありと云ふ人あり

是は文を知らぬ人の申しごとにてあるなり、此文の次に難中之難とあればかたくおこしかたき信なれども佛智より得やすく成就したまへり、一大事と云ふ人あらば此人に同心あるべきよし仰られ云々とありまず、此文のこゝろは前に記す如く宿世に佛恩を蒙らざれば此世にて信心をうることは難中之難こかたくおこしかたき信なれとも宿世に種々善巧方便の御恩を蒙りたるゆへに、今此世にて易くおこすことをうる信なれば此易きは佛恩の深きがゆへなりと、佛恩のふかきをしらせん爲にたゞ易しとばかり思ふ可からず、易は佛智より易く得らるゝように成就しあたへたまふ故に易いのじゃ信心のおこしがたきことは一劫中に說くもつくされずとの心を敎へたまふ文のこゝろなりとはいよ〳〵わかりました

一此釋迦如來さまの直說と四大師の直語と合せて易い〳〵とある御文をこゝろにかけて其前で信心の沙汰をしてみなされ、御文に合ふかあはざるか、若し信心をむつかしくも申し心中のよしあしを申し容易には得れぬ〳〵と申さば信心は易しといふべからず、佛の取やすしと說き、何のぞうさもなきなどの文はうそとなるべし、往生の得否は舍て正敎に合はず、そむくことは

必然でありますかよふの御文をならべても易しと信んぜざるは无眼人无耳人なりと申す外はあるまじ予は佛説師述に反する人には○○○○

是より信心と云ことの文の證こを申しましよ

一先御開山は難信金剛の信樂は疑を除きさとりをうるの眞理なりと○又此信樂は如來選擇の願心より發起せしめたまふと是は宗師の御料簡であります○又は无上の信心おしへてぞ涅槃の門をぞひらきけると法然さまよりおしへられたと申されたり○又は他力の願行を久しく身にたもちながら由なき自力にはだされてながく流轉の身とぞなると

一善導和尚は進退の心あり怯弱を生じ回顧道に落し往生の大益を失ふこと又は聞思して遲慮する勿れと是らの文敎は彼宿因なき人に申すことにはあらず、今現に法を聞く人に申す御辭なるは誰も知ることろなり、そこで淨土の往生はうたがひなく思ふてよろこぶ心なりとも申します

一善導大師は此人を道におとして大益を失ふことあはれみたまふこおもはれます、持たぬ物をおこすこは申されず、又他力の願行を身に保つこ申すも此人のことを申すこしられます、最早宿因により如來のたすけたまふこのことをば信じながらに信心こ云ふをしらずして口にも稱名しながらに疑をかけ、自力のはからひして決定せずして又まよふは不便なりこの御ことばこきこへます

一そこで阿彌陀如來さまがたすけて御淨土にまひらせ下ださるこのことはうそとは思はず本こは承知して おります、その故に聞心も出來寺にもまいる法座にも出るのでありますされども自身の往生今でも命おはれば こ思へば何こなくくらく不定に思ふこはまさか不信こは申しませぬ、此人のことは信不其足の人なり こ涅槃經に說れてあります、そこで今寺參して法を聞く人方はみな一人ものこらず御たすけをば本こ思ふ

人に相違はありませぬおしい事であります

一そこで其本と思ふその心を信心と申します信心とは疑はぬ心を信心と申すことは誰も聞ております御方の心の中に如來さまのたすけ下さると思ふ心の出きたるは中々御方や我やのこしらへて出來たる心にはあらず此本とおもふ心を興へん爲めには五劫永劫と御苦勞ありて御方や我の心の中に發して下されたる心と申します釋迦如來さまは御方と我の心の中に今本と思ふ心の出きたる譯を說けば一劫中說くもつきぬと申します御開山は此心をば如來撰擇の願心より發して下されたる心と申します又如來の无相の智衆生の心中に入りて出きたる心なれば其心を信心と云ふとも其心を信心と云と申すことを知らずして信ぜずと說きたまふてあります そこで御方や我の心の中には御たすけ下さることは本と思ふ心のありますは宿世の御方便を重ねて下された故に出きたる心と申します

此の本と思ふこゝろを彼人の佛はない未來もない皆うそなりと云人の心の中に此本とする心をおこさせんとすれば億佛集て力をつくすも彼人の心の中には出きぬ心と章句經に說れます宿因なき彼人なればなりと申します同し人間にして彼人はさよふに信んぜ

ぬ御方と我はこのよふに本とするの心を發すのちかひがあります其ちがひ目は彼人は宿因なく御方と我は前生の時に一劫說もつきぬと云方便の緣を蒙りたるゆへと說れます これを御開山は釋迦彌陀は慈悲の父母種々に善巧方便して我らが无上の信心を發起せしめたまひにきとしらせます 又たま〳〵行信をゐば遠く宿緣を慶べと仰せられます 宿世にさよふにまで御方便を重ねて下されたゆへに今此うたがひなき心本と思ふ心を發し下されたればこそと御恩を慶べとの仰と承る 又は佛語に虛妄なければ必定とおもへとも仰られます

一法然さまはうたがひなく往生するぞとおもひとりて申す外しさひなしと仰せられたるも同じこゝろと承る

一今の如く如來さまの御たすけ下さるとのことをば本とおもひとられてうたがひなきを信心と申すことは如來さまの御仰せ御正敎四大師の仰せなれば今はうたがひもなくさては其信心一つにて御たすけ下さることにいよ〳〵ちがひないと今思ひとるときに不思議の願力として佛の方より往生をば定め下さると御文章におしへられます 又仰せに往生は今の信力によりて御たすけにあづかることのありがたやかたじけ

なき其御恩報謝として命あらんかぎりは稱名念佛を申して佛恩を報じ申すべしと仰せられます是を十八願のこゝろと仰せられます

一此本とおもふ此心をば御開山の仰せには易は如來願力廻向之心と申されます今の如くに聞きにてみれば何のざうさもなく又何の苦勞も入らぬことでありましよう又あら往きやすの淨土やと仰せにも符合します又易は信心なりとの仰せによく合ひます

一今の如くに信じて今命おはれば早や往生は一定と仰せられます今夜眠り寢入たるとき命おはれば自身はおぼへざれども今の信心の業識に引れて御淨土に往生させて下さるとの仰であります

一さよふに信じて一聲御念佛申して命おはれば其ときに往生又さよふに信じて十聲申す時命おはれば亦其ときに往生をうると申します是は願力のゆへに往生をうるそこで十聲一聲佛の願力によりて皆往かざるはなし故に易しと名くこは善導大師の仰せであります

これを以て聞思して遲慮する勿れと云はそろ〳〵聞て信ずると云にあらず聞く時に直に信心は得ると思へとのことであります宿世見諸佛のゆへと申すことでありますかよふに信心決定してみれば今は阿彌陀如來さまが西方の淨土へまひらせ下さる其御恩報謝

こして南无阿彌陀佛〳〵と申すばかりなり此こゝろを御文章には其うへの稱名念佛は如來我往生をさだめたまひし御恩報盡の念佛ここゝろうべきなりと又如是決定してのうへには命あらんかぎりは稱名念佛すべきものなりと是はみな佛説のまゝでありますかよふに信じて念佛を申す身となりて後の用心のことの正教を申しましよう

一御在世も今日も念佛往生を本とおもうの心もちはかはらぬと見へます、人々心の中にうれしくありがたくもおもはるれば信心のよふにおもふ人が多いことでよろこぶ心があれば信心のよふにおもうよろこぶ心

がなければ信心もうせたるようにおもう人多し、これはよろこび心を信心とするゆへに進みたり退いたりする若存若亡この信をしられてあります、是はたゞよろこび心を信心とおもうゆへと申します、信心と喜びは前後がありまず、信心を先とし其信心の後に喜びは出る心なれば喜びは亦厚き人と薄き人とありて人々同じと云ふにはあらず、此ゆへに信心一つと申して信心と喜びと二つを以て本とするとは申されませぬ、若しよろこび心が信心ならば夜寢入りたるときにいかなる喜びの心をおこすべきやされば喜び心を信心とせば寢入りたるときに命おはらば往生せずとも云べきやそこで人多くは信心と云を心にぬと云々仰せられたる御文左に申します

一大方の人信心のよふを心に分かぬとおぼゆるなり、心のしみ〳〵と身の毛いよ立ち涙のおつるを信おこると申すことはひがことなり、それは歡喜隨喜悲喜こそ申すなり、信とは疑に對することばなり、疑を除くを信こそ申すなり、見ることにつけても聞くことにつけても一定さぞとおもひとるときは人いかに申すとも不定におもひとることはなきぞかし、これを物を信ずるとは申すなり、此うへに歡喜隨喜悲喜等のよろこびあるは亦すぐれたることなりと仰せられます、この御

文のこゝろをよく〳〵御案なさい信心と喜びとの分なることはよく分りました是は首楞嚴經摩事品に說たまふ佛語であります

一信心と歡喜とを合て信心のよふに心にたる人の現在を申さんに自分よりも多く聞きた人や亦學者や多くよろこび心のあらはれたる人の所に往くときは。いつも自身は負たるよふの卑下心をおこして。いかにも我の信心は彼人々に及ばぬと思ふこゝろを生じて退く心をもつなり是は喜び心や學門や多聞やを信心のよふに思ふがゆへに卑下心を生ずるなり我よりすぐれたるよろこびある人の前に卑下心を生ずる人は自分はどにもよろこびのない人に向ふときは慢心を生じて。それ位にては信心とはいはれぬと人を見下だし我には及ばぬものと輕んずるの心を生ずるなり此人上に向へば卑下心を生じ下に向へば慢心を生ず自身に引受るときはなきなり是はよろこぶ心を信心とするの心のすがたなり各自心を出して試みたまうべし

正教に反したり

一今の人に反し信心一にて往生をうると信じ歡びは信心にあらずと聞分けたる人の現狀を見れば自身より上等の學者亦は多聞者歡びすぐれたる人の前に向ひたるときの心には我は彼人の如くによろこぶ心もな

く、亦學解多聞もなき身なれども信心一つにて御たすけを蒙ると承りて候へば、彼人の如くよろこび心はなけれども、往生一定なりと我身の決定をよろこび少しも卑下の心を生ぜず、亦我ほどもよろこびなき人を見ても慢心せず、信心一つとあれば此人よろこびはうすく見ゆれども決定の信心あらば往生の人なるべし、中にも自身は念佛を相續する身となされたることのありがたやと自身念佛をよろこぶなり、上に向ひて卑下心を生ぜず、自身にかへりよろこぶ下に向ひても自身にかへりよろこぶ、これを信心一つと聞てよろこび心を信心に足さゞる人の心相の現狀なりとす、されば信心にはたすけをさすなと教へられたまふ、信心は信心なり、さらによろこび心も多聞も參詣苦行も諸供養佛事一切も信心にはあらず、信心の後に出るものなれば信心に其たすけをさすなと申すことなり、信心は只信心のうたがひなき心を信心と申すなり

一かよふに信心決定のゆへは佛恩報謝と云は御念佛を申すばかりにて少しもたらぬことはないと仰られたす、報謝と云は稱名に限り別に報謝と名けたることはありませぬ、御恩報謝とは一には信心、二には稱名、此二にかぎると申します、故に南无阿彌陀佛を申して何の不足ありてかしらぬくせ法門を云ふて人をもまことは

し、无上の法流をけがさんことなげかしきことなりと仰せられます、御稱名の外の佛事をば助業と申してあります

一御詞に助正ならべて修するをばこれも雜修と名けたり一心をにざる人なれば佛恩報ずる心なしと

一又助業を好む人これ自力をはげむ人なり、自力と云は我力をたのむ、我心をたのむ、我さまくの善根をたのむ人なり、上盡一形とは念佛せんこと命おはるまでなりとは御開山の仰せでありますされば念佛申すの外佛事は助業と名て佛恩報謝とは名けてはありませぬ今ごろは何もかも報謝々々と申すは後の人の申すことにて正教の御文にはありませぬと存じます、學者は助業と云はわろし、何もかも信の後はことくく報謝と云がよしと云ふ人はあれども御文にはありませぬ師匠と定めたる上はたとひ地獄なりとも佛說や師の說になきことはいかなる人の申すことも耳には入れませぬ、正雜二行を方便して、ひとへに專修をすゝめしむとの仰もあります、先づこれで止めましよう念佛相續のことに於てはいくにも御文がありますに重ねて問はせたまふべし、聞申すほどは御文を申さん

南無阿彌陀佛　願共諸衆生　往生安樂國

明治二十一年一月廿五日　小川獨笑

◎專修專念の外相

一牛ぬす人とはよばるとも後世者佛法者と見ゆるやうにふるまふべからずと

一又內心にふかくたくはへて外相に見へぬようにふるまふべしと

一人數の中に出てよろこぶは名聞なりひとり居てよろこぶ法なりと○又他人に沙汰あるべからずと又外相に見ゆるようにふるまふべからずと

一以上は外にみゆるようにふるまふべからずと戒め玉ふは經釋同一なり蓋し專修專念に導くの眞義なり專修の法器なり

一世間出世間理一なりとは佛說法花經にみえたり、されば世間事を引て專修專心のよふを知らんと欲す

一忠臣藏大石藏之助は一心一向至心に敵を心がけて果さんとす故に外相に其色を人に見せぬよふにふるまひ外相は主人の逮夜に蛸肴の不

忠臣の如くふるまへり、天川屋は兵器を櫃中に収めて人に見せぬよふにふるまへり、さらに名聞を求めざるのみか名聞大に慎み恐れたり、是は世間煩悩の一道といへとも雑行雑修をまじへず、専心専念専修一心一向さらに餘の方に心をふらず、只一向に敵人をねらひ、ねてもさめても命あらんかぎりは主恩に報謝の心屈せず撓まず、身命を抛ち身も已も忘れて至心に之を念ず故に外相に人に見えぬようにふるまへり、世間小事も以て一大事に比するに足るべし

一大石天川屋は外相は遊郎の如く兵器は櫃中に収めて人に見えぬように忠臣のすがたをあらはさず、慎みたるに終に忠臣の名は洩てて千歳の後に。あらはれてかくれず、善悪によらず一心の感通するの理は一つなり

一されば至心に本願を信ずる人は外相に見へぬように心がけて、佛前の道具は天川屋の櫃中に収めて人に見せぬようになるべく質素を旨とし、只々一佛の阿彌陀如來を念ずるは、大石の敵人をねらうが如く、更に餘の方へ心をふらず、佛恩相續をひそかにし餘そ目には後世者と見へぬようにふるまひ、念佛するを専心専念一心一行の信者の心がくべきの眞相なるか故に名聞を戒むること上に述ぶるが如く、佛も宗師も示し玉ふことしられたり

一大石は唯一人内心に深く一心にたくはへて外相に見へぬようにふるまひたるも何れにか。もれて四十餘人はひそかにこれを知り得て訪ひ來て同心を結び同じ心に住して一心一向に忠臣を共にせられたり

一今信者も亦かくの如し、一人内に深くたくはへて外相にみへぬよふにふるまひ、ひそかに念佛相續すれば何れにか。もれて一大事の志ある人の目には見へて尋ね來て一心專念を共にして往生を期する人々の人數少しといへども、さらに餘の方へ心をふらず、念佛相續する友を得て、川に流るゝ柴の如く、前後往生の契りを結ぶ同行に親近するは專修のゆへなりと善導佛も示さ

れたるの證友を見るとを得たり、されば助正ならべて修するをばこれも雜修と名けたり、一心をひざる人なれは佛恩報する心なしと

以んみるに是も佛事、是も報謝、參詣も報謝、學問も報謝、是も彼も信心決定の後は佛事も世事もこと〳〵く報謝なりと云ふは至極理屈は密なれとも、經釋に見へず論釋にも見へず、されば私言なること知るべし

佛恩報謝とは、一には信心二には稱名、此二を以て眞成報謝とは經中に見へたり、釋には教人信眞成報佛恩と云もあり、此外善行佛事は因果業報功德勿論といへとも佛恩報謝と名けたる明文を聞かず○信心と稱名とを專修專念するを一宗の旨とするは佛說によるがゆへに此二つを不足とし餘の佛事をならべて同くするを助正ならべて修すると申すなり此人一心を滿足せず、故に念佛相續して佛恩を報する心なしとあらはせりと云ふは予の業識見なり、づら〳〵世人を見るに一心をして更に餘の方に心をふらずして信心の後一行稱名相續にて本願相應と信じ滿足の心に住し一行念佛を修する人は信心も堅牢なる相見へたり、之に反して寺參詣も報謝、寄附も報謝、法談も何もかもと雜る人々は果して念佛相續して佛恩を報ずるの心なきを見るなり、此人信心も堅牢ならざる相みへたり、雜修の人

は信心堅牢ならずとは經釋の明文あり、懈慢國に生ると經には說れたり、信じて念佛するは十八願の文意たるは誰も知る處なり、此行信の外一切の佛事は十八願に非ず、故に御和さん正信偈八十通の中に信て念佛すると卽ち信心正因稱名報恩の二つに限り、さら〳〵別のことあらはし玉はず本願の旨をあらはす爲なり、予の信心此の如し別義を存んぜず

◎四十八之奧之手談

元祖大師曰く念佛の數を多く申す者を自力を勵むと云ふ事、是又物もおぼへぬ淺猿き僻事なり、只一念二念を唱ふこも自力の心ならん人は自力の念佛とすべし千遍萬遍を唱ふこも百日千日夜る晝る勵み積とも偏に願力を憑み他力を仰ぎたらん人の念佛は聲々念々併ら他力の念佛にてあるべし、乃至願力を仰き他力を憑みたる心にて唱へ申たればかけてもふれても自力の念佛とは云ふべからずとなり⊙唯信鈔曰く一念にたれりと雖も、いたづらにあかしいたづらにくらし、功をかさねんこと要にあらずやと思ふてとなへんに夜もすがらにとなへ日もすがらにとなふこも、益功德をそへいよ〳〵業因の決定すべしとなり（初め發起するところの安心いよ〳〵とふとくなるにいたるべし）

四十八の奧の手と云は至ていやしく下作にみへる手にして、智者學者多聞者精神者の好む方の希なる下作

なる手に似たり臨終の一日になりては多く誰も好む手なり智者或は申すに信心決定の上は種々の作業佛事を勤むべしと作業二種あり畧す愚者或は云ふ信心決定の上は愈作業を顧みず念佛執持すべしと是亦二種あり畧す上根の人のためにはいやしくもわれらがためには最上の法にてましますと云へるが如く此奥の手は智者上根の人の賞美することの少きいやしき手なりしかも我ら愚癡是非しらざる文妄頑魯の者且老体衰弱不健の者のためには愈無上の手なり此手を好み樂むものは怯弱志幹の心なきに似たり又能く分別智ある智者は好むひと少れなり何れも宿因によるとみへたり此手を樂む姿は世にある人かみるならばをかしかるらんと咏じられたる如くいかにもつたなくいやしく誰も好まぬ手なり之によりて俄かに記して我身の戒に具へんとする所なり

寶積經　正法滅壞時柔和者難得○人多勢力柔和者弱劣是知正法衰

第一○尋常に非ず臨終に非ず不可稱不可說信樂とあれば左右を顧みず

○念佛申すが手にて候

第二○往生の期も今や來らんと油斷なく其かまへは候

○念佛申すが手にて候

とあれば

第三○信心ありとも名號をとなへざらんはせんなく候

とあれば

第四〇又一向名號をとなふとも信心淺ば往生し難しとあれば念佛往生と深く信じて〇念佛申すが手にて候

第五〇稱名念佛是彼佛本願行なりとあれば

〇念佛申すが手にて候

第六〇彌陀以名號攝物是以耳聞口誦無邊勝德攬入識心爲佛種とあれば

〇念佛申すが手にて候

第七〇斯行即是攝諸善法具諸德本極速圓滿眞如一實功德寶海故名大行とあれば

〇念佛申すが手にて候

第八〇聲と念とは一つ心なりとあれば

〇念佛申すが手にて候

第九〇今身願生彼國者行住座臥必須勵心尅己晝夜莫廢畢命爲期上在一形似如少苦前念命終後念即生彼國とあれば

○念佛申すが手にて候

第十〇助業を好むものこれすなはち自力をはゆむ人なり上在一形とは念佛せんこと命をわらんまでとなりとあれば

○念佛申すが手にて候

第十一〇念佛は行者の善にあらず行者の行に非ず彌陀佛智なるが故にとあれば

○念佛申すが手にて候

第十二〇法然聖人ノ文阿彌陀佛の本願にわが名號を稱念せばがならず引接せんと仰せられたれば決定して攝取せられ奉るべしとふかく信じて心に念じ口に稱するにものうからずとあれば

○念佛申すが手にて候

第十三〇開山聖人ノ文彌陀の本願とまふすは名號をとなへんものを極樂へむかへんとちかわせたまひたるをふかく信じてとなふるがめでたきことにて候とあれば

○念佛申すが手にて候

第十四〇南無阿彌陀佛と申してうたがひなく往生するぞとをもひとりて申す外別の子細候はずとあれば

○念佛申すが手にて候

第十五〇親鸞に於てはたゞ念佛して彌陀にたすけられまひらすべしとよき人の仰せをかふむりて信ずる外別の子細をきなりとあれば

○念佛申すが手にて候

第十六〇佛恩報盡の稱名は行住座臥にわすれざること間斷なしとあれば　〇念佛申すが手にて候

第十七〇往生はとの一大事凡夫のはからふべきにあらず一すぢに如來にまかせたてまつるべしとあれば　〇念佛申すが手にて候

第十八〇至心信樂願爲因彌陀佛本願念佛とあれば　〇念佛申すが手にて候

第十九〇唯能常稱如來號應報大悲弘誓恩とあれば　〇念佛申すが手にて候

第二十〇一心專念彌陀名號行住座臥不問時節久近とあれば　〇念佛申すが手にて候

第廿一〇順彼佛願故攝畢此生无有退轉唯以淨土爲期とあれば　〇念佛申ずが手にて候

第廿二〇稱名則是最勝眞妙正業正業則是念佛念佛卽是南无阿彌陀佛とあれば　〇念佛申すが手にて候

第廿三〇この六字の名號のうちには無上甚深の功德利益の廣大なるこゝさらにそのきわまりをきものなりとあれば　〇念佛申すが手にて候

第廿四〇晝夜六時專稱念終時快樂如三昧勸諸行道者勤修至無餘とあれば　〇念佛申すが手にて候

第廿五〇うれしさのまゝ數をとなふるとあれば　〇念佛申すが手にて候

第廿六〇我はたゞ御名を稱ふるばかりなりとあれば
○念佛申すが手にて候
第廿七〇信にはかずの多き念佛とあれば
○念佛申すが手にて候
第廿八〇憶念の心常にして佛恩報する思ひありとあれば
○念佛申すが手にて候
第廿九〇本願名號信受して寤寐にわするゝことなかれとあれば
○念佛申すが手にて候
第三十〇ねてもさめてもへたてなく南无阿彌陀佛をとなふべしとあれば
○念佛申すが手にて候
第三十一〇憶念とは信心まことなるひとは本願をつねにをもひいづるこゝろのたへずつねなるなりとあれば
○念佛申すが手にて候
第三十二〇御恩德の深遠なる事を信知して行住座臥に稱名念佛すべしとあれば
○念佛申すが手にて候
第三十三〇本師龍樹菩薩の教を傳へきかん人本願心にかけしめて常に彌陀を稱すべしとあれば
○念佛申すが手にて候
第三十四〇選擇本願には若我成佛。十方衆生。稱我名號。下至十聲。若不生者。不取正覺とあれば
○念佛申すが手にて候
第三十五〇ひめもすにとなへよもすがらにとなふとも

報謝のは
念佛たりぬと
安はて
ほとり
まつれり
口も
はたらく

いよ〳〵功德をそへますべし〳〵業因を決定すべしとあれば

第三十六○南无至心歸命禮西方極樂世界阿彌陀佛とあれば

○念佛申すが手にて候

第三十七○行者のよからんともあしからんとも思ぬを自然とは申すなりとあれば　○念佛申すが手にて候

第三十八○信心の二字をばまことのこゝろとよめるなり信の心と云は凡夫のわろき自力の心にては往生せず如來のよき御心にてたすかるこゝろ、されば機にとどこふらずうちはなれて南无阿彌陀佛〳〵と憑入こそめで度往生にて候こゝろあれば○念佛申すが手にて候

第三十九〇親鸞の仰せには外事候はずはからはず只稱名喜ぶばかりに候とあれば。〇念佛申すが手にて候

第四十〇極樂のねがはしくもなく念佛の申されざらんこそ往生のさはりにてはあるべけれとあれば

〇念佛申すが手にて候

第四十一〇我身の往生一定をぼしめさん人は佛の御恩をぼしめさんに御報恩のために御念佛こゝろに入れて申てとあれば

〇念佛申すが手にて候

第四十二〇信心決定して眞實報土の往生をとげんと思はん人こそまことにその身の德ともなるべけれ、これまた自行化他の道理にかなへりとをもふべきものなりとあれば

〇念佛申すが手にて候

第四十三〇人のうへばかりみて我身の上をたしなまずば一大事なりとあれば

〇念佛申すが手にて候

第四十四〇佛法には明日と申す事あるまじく候佛法のことはいそゆ〳〵と仰られ候とあれば

〇念佛申すが手にて候

第四十五〇縱令一生造惡の衆生引接のためにとて稱我名字と願しつゝ若不生者とちかひたりとあれば

〇念佛申すが手にて候

第四十六〇佛智にたちかへりてありがたやたふとやとおもへば御もよふしによりて念佛申すなりたしなむ

とはこれなる由云々とあれば○念佛申すが手にて候
第四十七○南無と云へば彌陀はきにけり一つ身を我と
や云はん佛とや云んとあれば○念佛申すが手にて候
第四十八○一失人身萬劫不還。此時不悟。佛如衆生何。願深
念於無常。勿徒貽於後悔とあれば念佛申すが手にて候
四十八の奥の手○信樂彰於願力妙果顯安養
但無爲境不可輕爾卽階苦惱婆婆無由輙然得離不親從
慈尊何以免斯長歎○其言雖異其意惟一眞實信心必具
名號○我はたゞ御名をとなふるばかりなりとあれば
念佛申すが手にて候　終
◎續四十八の奥の手談（御文章秘鈔五帖中）

夫れ八十通は云何一言を以て蔽んや則言この六字の
うちには無上甚深の功德廣大なること更に其きはま
りなきものなりと此一言なるべし。されば八十通は六
字の釋なりとみへたり又言無量壽經は名號を体にし
て說きたまへりと此八十通は六字の体を開闡口授の
方法なるべし奉すべし耳すべし則一代經を攝したる
は八十通なり御文に順するを佛語を隨順すと云べし
若し照準して心中八十通に違するあらば私ごとなり
四十八の奥の手の旨趣は先の一本の序に記したれば
略す、これは中祖大師の八十通の中より鈔出したるも
のなり往生は由斷にてしそんずるこもあり御念佛の

念佛の内よ
へたゝけ
居食住
あれも助業と
所ハ教へ
ゆ了利

懈怠する間はみな由斷と自ら戒めをはんぬ、御念佛は御報恩と聞て申してもよし、又は申さぬでもよしとし外より取よせたる品ものと同く思ひはんべりしが、機法一体の六字なれば念佛は行者の善にあらず、行者の行にあらず、彌陀佛智なるが故に云々と大師は仰あり き、彌西方の一路今や往生の期も來らんと御念佛を申す身と御催しを蒙りたる上は愈たふとくありがたく更に其きはまりなきものなりと仰ありしが如し、此奥の手は多く臨終の一日に至りては誰も好む手なり、平生はちと窮屈なるよふにもみへ又は怪しもみゆる手なり、然しながら臨終の一日を待て後ならでは誰も此

手の妙不妙をば沙汰すべき手に非ず上根の人のためにはいやしくもわれがためには最上の法にてまします云々仰ありしが如く此手はいやしくつたなくみゆる手なり、されども臨終に至るときは無上の手なるを知る手なり、是故に我は平生に最上の手と申すなり故に中祖大師は何の不足ありてか諸行諸善にこゝろをとゞむべきや南無阿彌陀佛といへるは萬善萬行の惣体なれば、いよ〳〵たのもしきなりと仰ありき

一〇コヽロハ身ニモアマルトイヘルハ正雜ノ分別ナキヽ分ケ一向一心ニナリテ信心決定ノウヘニ佛恩報盡ノタメニ念佛マフスコヽロハオフキニ各別ナリとあれば

二〇如來ヲタノム心ノヲモサメテモ憶念ノ心ツネニシテワスレザルヲ本願タノム決定心ヲエタル信心ノ行人トハイフナリとあれば

三〇サテコノウヘニハタトヒ行住座臥ニ稱名ストモ彌陀如來ノ御恩ヲ報ジ申ス念佛ナリトオモフベキナリとあれば

四〇御タスケアリツルカタジケナキ御恩報謝ノタメニワガイノチアランカギリハ報謝ノタメトオモヒテ念佛マフスベキナリとあれば

五〇一念ノ信心發得已後ノ念佛ヲバ自身往生ノ業トハ

○念佛申すが手にて候

○念佛申すが手にて候

○念佛申すが手にて候

オモフベカラズタヾロトヘニ佛恩報謝ノタメニコヽロエラルベキモノ也とあれば○念佛申すが手にて候

六○上盡一形ハ佛恩報盡ノ念佛ナリトキコヘタリとあれば

七○他力信心トイフ事ヲカンカト心中ニタクハヘラレ候テソノウヘニハ佛恩報謝ノタメニハ行住座臥ニ念佛申サルベキバカリ也とあれば○念佛申すが手にて候

八○今日マデモ往生ノ期モ今ヤキタラント油斷ナクソノカマヘハ候とあれば○念佛申すが手にて候

九○面々ノ心中モコトノ外油斷トモニテコソハ候へ命ノアランカギリハワレハイマノゴトクニテアルベク候ヨロヅニツケテミナ〳〵ノ心中コソ不足ニ存ジサフラヘとあれば○念佛申すが手にて候

十○コノウヘニハチテモサメテモタテモ井テモ南无阿彌陀佛トマフス念佛ハ彌陀ニハヤタスケラレマイラセツルカタジケナサノ彌陀ノ御恩ヲ南无阿彌陀佛トトナヘテ報ジマフス念佛ナリトコヽロフベキナリとあれば

十一○一念ニワガ往生ハ如來ノカタヨリ御タスケアリケリト信ジタテマツリテソノヽチノ念佛ハ佛恩報謝ノ稱名ナリトコヽロエ候ベキナリとあれば○念佛申すが手にて候

十二〇タヽヒトスヂニ彌陀ニ歸シテコノタビノ往生ハ治定ナルベシトオモハヽソノアリガタサノアマリニ念佛ヲマフシテこあれば

〇念佛申すが手にて候

十三〇セメテハ念佛修行ノ人數バカリこあれば

〇念佛申すが手にて候

十四〇彌陀如來ノ他力ノ信心ヲワレラニアタヘタマヘル御恩ヲ報ジタテマツル念佛ナリこあれば

〇念佛申すが手にて候

十五〇行住座臥ニ口ニトナフル稱名ヲバタヽ彌陀如來ノタスケマシマス御恩ヲ報ジタテマツル念佛ゾトコヽロウベシこあれば

〇念佛申すが手にて候

十六○我身ハワロキイタヅラモノナリトオモヒツメテ
フカク如來ニ歸入スル心ヲモツベシとあれば

○念佛申すが手にて候

十七○稱名念佛ハ彌陀如來ノ我ラガ往生ヲヤスクサダ
メタマヘルソノ御ウレシサノ御恩ヲ報ジタテマツル
念佛ナリとあれば

○念佛申すが手にて候

十八○ワガハカラヒニテ地獄エモオナズシテ極樂ニマ
イルベキ身ナルガ故也とあれば念佛申すが手にて候

十九○口ニツキニ稱名ヲトナヘテカノ佛恩報謝ノタメ
ニ念佛ヲ申スベキバカリナリとあれば

○念佛申すが手にて候

二十○フカクコヽロシヅメテ思案アルベシマコトニ
モテ人間ハイヅルイキハイルヲマタヌナラヒナリア
ヒカマヘテ由斷ナク佛法ヲコヽロニイレテとあれば

○念佛申すが手にて候

廿一○晝夜朝暮ニトナフルトコロノ名號ハ大悲弘誓ノ
御恩ヲ報ジ奉ルベキバカリナリとあれば

○念佛申すが手にて候

廿二○ハヤ往生治定ノウヘニハ行住座臥ニ口ニマフサ
ントコロノ稱名ハ彌陀如來ノワレラカ往生ヲヤスク
サダメタマヘル大悲ノ御恩ヲ報盡ノ念佛ナリとあれ
ば

○念佛申すが手にて候

廿三〇報謝ノタメニハチテモサメテモ念佛ヲ申スベキバカリナリとあれば

〇念佛申すが手にて候

廿四〇タヾチガフベキハ極樂淨土タヾタノムベキハ彌陀如來コレニヨリテ信心決定シテ念佛申スベキナリとあれば

〇念佛申すが手にて候

廿五〇ヒトタビ彌陀如來ニタスケラレマイラセツルノナレバ御タスケアリツル御ウレシサノ念佛ナレバコノ念佛ナバ佛恩報謝ノ稱名トモイヒマタ信ノウヘノ稱名トモマフすとあれば

〇念佛申すが手にて候

廿六〇唯能常稱如來號應報大悲弘誓恩トアレバイヨイヨ行住座臥時處諸緣ナキヲハズ佛恩報盡ノタメニタダ稱名念佛スベキモノナリとあれば

〇念佛申すが手にて候

廿七〇イヨ〳〵彌陀如來ノ御恩德ノ深遠ナルコトヲ信知シテ行住座臥ニ稱名念佛スベシ、コレスナハチ憶念彌陀佛本願自然卽時入必定唯能常稱如來號應報大悲弘誓恩トイヘル文ノコヽロナリとあれば

〇念佛申すが手にて候

廿八〇佛恩報謝ノタメニハチテモオキテモタヾ南无阿彌陀佛トバカリトナフベキナリとあれば

〇念佛申すが手にて候

廿九〇念佛ノ信心ナトリテノウヘニナヲオモフベキヤ

ウハサテモカヽルワレヲゴトキノアサマシキ一生造悪ノツミフカキ身ナガラヲ略タヤスクタスケタマヘル彌陀如來ノ不思議ニマシマス云々ソノ御恩報謝ノタメニハチテモサメテモタヾ念佛バカリヲトナヘテこあれば

○念佛申すが手にて候

三十○南无阿彌陀佛トイヘル名號ハ萬善萬行ノ惣体ナレバとあれば

○念佛申すが手にて候

三十一○阿彌陀如來ノ御袖ニヒシトスガリマイラスルオモヒナシテとあれば

○念佛申すが手にて候

三十二○佛恩報盡ノタメニハツチニ稱名念佛ヲ申シ奉ルベキモノナリとあれば

○念佛申すが手にて候

言葉にて
念佛信ずる
方もあり

あり難き保の
うき
やつこ人

三十三○我ヲガ淨土ニ往生スベキコトハリナコノ六字ニアラハシタマヘル御スガタナリトイマコソヨクハシラレテイヨ〳〵アリガタクタフトクオボエハンベレとあれば

○念佛申すが手にて候

三十四○念佛バカリナトナヘテカノ彌陀如來ノ佛恩ナ報ジタテマツルヘキバカリナリコノウヘニハ後生ノタメトテナニナシリテモ所用ナキトコロニとあれば

○念佛申すが手にて候

三十五○シラヌクセ法門ナヒイテ人ナモマドハシマタ無上ノ法流ナモケガサンコトマコトニモテアサマレキ次第ナリとあれば

○念佛申すが手にて候

三十六○タヾユメノ如シ、マボロシノ如シ、イマニイタリテハ生死出離ノ一道ナラデハナガフベキカタトテハ一ツモナクマタ二ツモナシとあれば

○念佛申すが手にて候

三十七○佛恩報謝ノタメニ念佛シテ畢命ナ期トスベシコレスナハチ平生業成ノコヽロナルベレとあれば

○念佛申すが手にて候

三十八○法ヲキクミナニコヽロノサダマレレバ南无阿彌陀佛トトナヘコソスレとあれば念佛申すが手にて候

三十九○タヾナニ宗トモナキ念佛バカリハタフトキコト、存ジタルバカリナルモノナリトコタフベシとあ

れば

四十〇二六時中ノ稱名念佛今古退轉ナシとあれば

〇念佛申すが手にて候

四十一〇予ガ安心ノ一途一念發起平生業成ノ宗旨ニオイテハイマ一定ノマヒタ佛恩報盡ノ稱名ハ行住座臥ニワスレザルコト間斷ナシとあれば

〇念佛申すが手にて候

四十二〇第十八ノ念佛往生ノ誓願ノコヽロナリカクノゴトク決定シテノウヘニハチテモサメテモイノチノアランカギリハ稱名念佛スベキモノナリとあれば

〇念佛申すが手にて候

四十三〇タスカランコトノウレシサアリガタサヲオモハヾタヾ南无阿彌陀佛〳〵トトナフベキモノナリとあれば

〇念佛申すが手にて候

四十四〇六字ノ名號ノウチニハ無上甚深ノ功德利益ノ廣大ナルコトサラニソノキハマリナキモノナリとあれば

〇念佛申すが手にて候

四十五〇サレバアシタニハ紅顏アリテタニハ白骨トナレル身ナリとあれば

〇念佛申すか手にて候

四十六〇彌陀如來ノヤスク御タスケニアヅカルベキ事ノアリガタサ又タフトサヨトフカク信ジテチテモサメテモ南无阿彌陀佛〳〵ト申スベキバカリナリとあ

れば

四十七〇阿彌陀如來ノ攝取ノ光明ヲハナチテソノ身ノ婆婆ニアランホドハコノ光明ノナカニオサメヲキマレマスナリとあれば

○念佛申すが手にて候

四十八〇五帖末章南无阿彌陀佛トトナフルコヽロハイカンゾナレバ阿彌陀如來ノ御タスケアリツルアリガタサタフトサヨトオモヒテソレヲヨロコビ申スコヽロナりとあれば

○念佛申すが手にて候

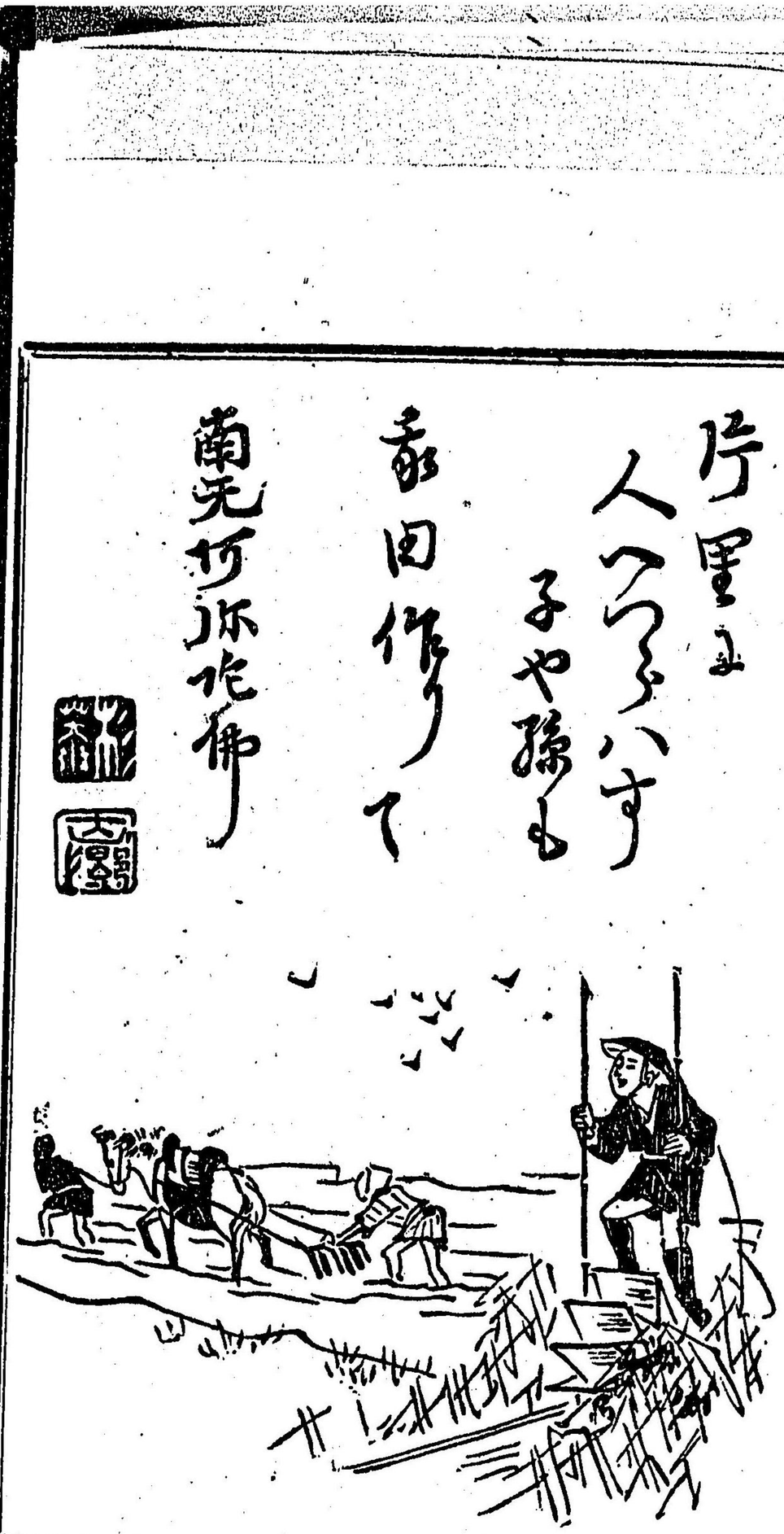
然ればよろこぶことは別のことを申すには非ず御念佛を申すがすなはちよろこぶ事なること明かなり元祖大師一念十念と執して上盡一形を捨る條無慚無愧是懈怠無道心の至りなりと○信のうへは益々御念佛を申すに日一日彌いとまなくこそ思ひはんべれ信のうへなればとて安閑としてくらせと申すこと經釋ともにみへざることなり蓮臺に手のとゞく迄はとも又は未出一苦域如何不恐懼とも仰ありき行者心を留むべしとも行者の用心なりともあれば記して座右の戒めに具ふと云

明治二十年十一月三日　小川獨笑

一安樂佛國ニイタルニハ無上寶珠ノ名號ト眞實信心ハカリニテ無別道故トトキタマフ

一恩愛ハナハダタナガタク生死ハナハダツキガタシ念

行里ゑ
人へつゝハす
子や孫も
赤田作りて
南无阿弥陀佛



佛三昧行シテヅ罪障ヲ滅シ度脫セシ

一信心トイフモ南无阿彌陀佛ノウナニコモリ候ナリ近頃人別ノヨフニオモヘリ。

一外傳にも大仁は不仁とも云へり果して然り一飯の恩に報ひんと思はざるものは少なし天地の恩を感動したるを未だ聞かざるが如し大德は不德の如し小智は大智を見ること能はず夫然り南无阿彌陀佛は僅に六字なる故に其無上寶珠なる故に萬德を攝する故に諸善本諸德本を攝具する故に極速圓滿眞如一實寶海なるが故に廬山蓮宗念佛功德七勝の一稱佛一聲四天下七寶佛及阿羅漢に供するに勝卽大悲經の文意を述る

が如く一聲念佛八十億劫生死の重罪を除くことも說たまふ、如是は無類無上なるが故人々尊重すること甚少なり、因緣あらずんば何ぞ至心に尊重することを得んや、信心と云も此南無阿彌陀佛のうちにこもれりと思ふべし、近ごろは人別のよふにをもへりとも御文章には示したまへり

一安樂集には大寶藏を開て一切大寶を思ひのまゝ一月の間一切の人々に施すよりも一聲の念佛勝と云々、此故に御文章には念佛ばかりをとをへてかの彌陀如來の佛恩を報じたてまつるばかりなり、このうへには後生のためなにをしりても所用をきこころにとも示したまへり、又御文章には他力の信心とはたゞ南無阿彌陀佛なり、この六字のこゝろをくはしくしりたるがすなはち他力信心のすがたなりとものたまへり

一凡夫何事をしりてか諸佛菩薩よろこびたまふほどのことをなし得るや、只信心のうへに稱名するこそ佛菩薩の圍繞したまひ冥守護持の益をうることにこそあれ稱ふる我の功業には非ず名號の尊きが故なり、又信後の念佛彌陀佛智より成せしむるが故に行者の善に非ず行者の行に非ずとこそは仰られたり、故に稱名念佛是彼佛本願行也とものたまへり、如是無上殊勝なるが故に人尊重すること少なし金の千圓百圓は人驚て

稱すれども一聲の念佛をば稱譽すること甚少なり宜
哉小智は大智を見ることの能しがたきが如く大仁は
不仁なるが如し何れも宿因によるとみへたり故に大
師は此上は念佛をとりて信ずるなりとも又すてんと
も面々の御はからひなりとものたまへり

一左の三大師の御詞は因緣によりては平生に得る人も
あるべし多くは此味ひは臨末の夕にいたらざれば了
解する人すくなかるべし深く臨終を案じて大師の深
旨を伺ひ自身のこくをとるべきことなり平生の人は
容易には聞入がたし

○不可稱不可說の信樂なれば云ことはたへてあるべか
らず○一文不知者に同して智者のふるまひをせずし
て唯一向に念佛すべしと是畢竟究竟可仰可信○智者
なればこそ云ことはあれ愚者には云ことなし不可稱
の信樂は愚にあらずして何ぞや故に淨土宗の人は愚
になりて往生するぞとたしかにきゝて候このたまへ
り○淨土の往生はうたがひなく思でよろこぶこゝろ
なり穴賢〳〵

一世を樂むの客人豈此こゝろを了するものあらんや十
住毘婆娑論中に一心信樂無有疑惑於餘事中無如是樂
於深法中得滋味故と得滋味故にあらずんば何ぞ語る
べけんや以上申すは是こそ智者のふるまひにてぞあ

世流れの
思案五風も
さハりなし
蓮花ハ泥の
池よりそ

れとをかしくこそ候へ、みな智を好む我の馬鹿ものなるが故なり、あゝさて夢の浮言〳〵をかしくこそあれ

南無阿彌陀佛　西方西方

諸行無常。是生滅法。生滅滅已。寂滅爲樂○畢竟究竟信樂彰於願力。妙果顯於安養○不生不滅

讀者片見すべからず

一報謝ノタメニハチテモサメテモ念佛ヲ申スベキバカリナリソレコソ誠ニ佛恩報盡ノツトメナルベキ者也

一南無阿彌陀佛〳〵トコエニトナヘテソノ恩德ヲフカク報盡申スバカリナリトコロフベキモノナリ

一優婆塞戒經ニ如何可離內外惡不淨因緣。此人應修念佛。

心常信念佛者。離內外惡不淨因緣。生悲惠

一善根は一小の善もこるべく惡行は一毛の惡も捨べきものこす、善惡共に其報を得勿論なり聖者誰かこれを捨てんや

一香花燈明佛に供するの善根功德一々經に說れたり宗師は我法相應の行にあらざるゆへに。これをあらはさずこみにたり、予も經中にてこれを讀てしるなり宗師これを述べず、予亦之を口外せず我信ずる本願相應の行にあらざればなり

一佛　淨飯大王にすゝめたまふも念佛の一行なり

一功德は十方に滿こ云萬善行の總体こも云一切の功德にゝぐれたりこ云

一大善根福德因緣こも云故に念佛にまさる善なきゆゑに善もはしからずこ云

◎悲歎述懷追悼

一同郡域井村字合樂住某は明治三十四年十月大雨浩水の爲めに新築瓦屋并に一家人員及び近隣婦女子共に一夜の間に流亡死すこ云、一たびこれを聞くや悲哀に堪へず、一室の中に在りてこの不意の死にいたることを悲む其含識は今何れに在るや

一こゝに於て自ら此老境に長壽を得て今日まで浩水の難にもあはず存命し、往生の一途、本願の一法にあひし

ことの不思議なることをよろこび念佛す、これひとへに遠き宿緣の佛恩の深きを念じおもひうかびしまゝを記す

一釋迦佛說玉ふ世間の理も未來世も理は一つなりと、佛說によつておもひうかびしまゝを記す

一某は新築瓦屋の堅きをたのみにして自身も家内も流亡し、幷に近隣の人までも瓦屋の高き二階をたのみて終に共に流死すと云

一茅屋の小細なるに住する人々は或は自然の高地に住し、又は洪水と見ては小屋の微小なるはたのむに足らずと驚て高地にさけて爲めに難を免れて生命を全ふするを得たりと云、佛法亦此理なからんや

一予の如きは經釋を讀み文義を記憶し、往生の用ごまではせざるも何にとなく己をよしとおもひて一文不知の人をかしづく心もなく、小原にては宮本半三郎氏多く法文を聞きおぼへたりしも、今は往生の用にも

ならずとしられて、予と共にたゞ念佛報恩のみに日をくらす身となりたるはいかなる宿緣にてありしや

一一念こゝにいたれば予の經釋を讀む半三郎の聞きおぼへたる法文の多きは、合樂某の瓦屋の堅きをたのむと同じことにぞあるべけれ、只我と氏との流亡のみならず、或は他の隣家の人をも流亡せしむるもしるべからず

一こゝに八十才以上の老母あり一文不知にして一句の法をもおぼへず、亦しらずしてたゞ佛恩報謝の念佛を申して御淨土にまひらせてくださるとよろこび〳〵念佛するあり、此老母は彼の茅屋にて自然に高き地に在りて洪水の難をのがれて生命を無事に保つが如し亦ひくき地に在りて小屋のたむのべきにあらずとしたるが如し

一平生に見るときは瓦屋の高き家は堅く見へ、草屋は小さくして見ぐるしく見へたれども大水のときは瓦屋の高きをたのみたる人は流れ死す、草屋の小さきはたのみとせずして難なく命をたもつが如し

一平生に經釋をよみたる我は瓦屋をたのむか如し、半三郎氏の聞きおぼへたるは我と同く瓦屋をたのむが如し、すはや死なんとする大水來るときは彼一文不知の婆々樣はめでたく往生して三惡の難を免れ、我らは經

釋をよみ、又聞きおぼえたる智惠を以て往生の命は流亡してまよひに入ると云が如し

一此ゆへに无智のものに同じうしてたゞ一向に念佛すべしとおしえたまへり

一又よしあしの文字もしらぬ人はみなまことのこゝろなりけるをと申が如し、これは彼の婆々樣の如し

一善惡の字しりかほは大そらごとのかたちなりとは我と半三郎氏との如し、

一ものもおぼへぬあさましき人の念佛するをば往生必定とにませたまふとは彼ばゝさんのことなり

一文さたさかゝしき人のまひりたるをば往生いかゞと候ひしをたしかに見まひらせて候とは我と半三郎氏とのことなり

一何ことも〳〵用心專要々々と存じ候あなかしこ

◎自然法稱の說

廿九年二月廿二日日出東窓皓々たり爐邊に西座し念佛旁々茶を喫し、はからず思ひ浮たれば茲に記す

一御書に曰く親鸞の仰せにも外のことと候はずはからはず只稱名よろこぶばかりに候此外珍らしきことを仰せ候はゞ永き世御わかれと存じ候と

さて此めづらしきことゝは何れの事なるや只御文中について解了看過せり世の人は已に深くも了解せら

れたらんも愚老はさほどまでに及ばざりしが今や行住座臥念佛する身となりてつら〳〵かへりみれは昨日も今日も只今は只同くめづらしくもなき南無阿彌陀佛〳〵と同じことのみを申すなり同じことのくりことは世間には忌むべきものなり然るに予は老妄筆を執るの癖あり思ひ出に任せて筆紙を煩はず百有余册に及ぶ是又往々同しことを去年も記し亦今年も記す其重復することのおかしくと思ひしに翻て思へばそれよりも重復あり日夜に申す稱名これはど同じことのくりことはなしと爰に於て彼の御文に珍らしきことを仰せ候はゞ永き世御別れと存じ云々の仰を思ひ

得たり念佛はめづらしき新規の言にはあらずめづらしくもなきくりことの念佛南無阿彌陀佛〳〵これさらに珍くもなきくりことなり此念佛のくりことを申す外に種々文沙沙等の珍らしく巧み談じ智者らしき學者らしき多聞らしき人は永く御別れと存したゞくりことのいや重ねことの重復の言を申すは無智の姿なり、ものも覺へぬ者は珍らしきことを知り得ざればくりことの珍らしくもなき念佛を昨日も今日も止まず留めず相續するはかゝりにてあらば淨土にて對面申すべしとなり學解智者等のめつらしきを申す人には別れ申すべしとなり、さればめづらしき言とは稱名

の外はみなめづらしき言なり、稱名はめづらしくなき聲なりされば萬づの言はそらことなりたはことなりたゞ念佛のみそまことにて候云々御文にも符合せられたり、これ亦愚老の妄想料簡の所見なりおかしく候仰願くは一切同朋者此めづらしくもなき南无阿彌陀佛〳〵をくりかへし〳〵申しつゝ淨土の御面會を期し申さん哉

一今朝亦復妙なる思ひ浮び來れば亦記す、つら〳〵自心自身をかへりみれば南无阿彌陀佛〳〵と申し居たり我は何ゆへにかく念佛を申す者とはなりたるや勤めてかようの者と成らんとも思ひたるはごのこともお

ぼへぬなり、されば誰が我をかようの身に成したるならん、これは他力と云ふものならんが、さて自力他力なと申すことをば兼てきゝしかし、今思へは自力とは如何なるものなるや、亦他力とはいかなるものなるや、耳には之をきゝ口には申せども目には曾て其姿を見たることもなし、今我知らず〳〵只南无阿彌陀佛〳〵と申すばかりになりたり、是を他力と申すことならん、今や白髮の老衰となりたり、曾てかようの愚老とならんと勸めたるともなし、いつのまにかは年老のつもり〳〵て今は只今や來らんとするの老境とはなれり、是も亦自然なるべし、我は求めたることもなし、又願たることもなし、其實は好まぬは老病死なるものを、我不知〳〵今日にいたる、之亦他力なるや自然なるや、我にして我を評する能はず、只我の妙なるを思ふなり、是は不思議と申すことを聞く、これをも不思議と云ふべきや亦知らざるなり

一智者に問はゞ何とか教への言もあらんかと思へども いかなる智者といへども其人の無形の心中に分別するを口に云ふのみの外あるべからずとなどの妄想をなすのみにして口にはやまず、南無阿彌陀佛〳〵と申し居たるは誰の所致なるや我を知ること能はず況や他の人をや、默然功德ありとは佛說なりあなかしこ

〇されば南无阿彌陀佛と申す外はなるべくは默然たらんことを欲すといへども未だ能はず、やゝもすれば口はことを申すなり、これ全く蟬吟烏鳴空然のみ欣淨厭穢の妙術とはさても〳〵あなかしこなり

一仰せに淨土宗の人は愚になりて往生すとたしかにきゝて候と

又往生にはかしこき思ひを具せずして只ほれ〴〵と彌陀の御恩の深重なることを常に思ひ出しまいらすべし、然れば念佛申され候是れ自然なりと、これ他力にましますことなり〇されば口はめづらしきことをも申さずめづらしくもなき南無阿彌陀佛〳〵と申すは愚なるすがたなり、さてかしこき思ひをなすことは文沙汰ともし信心の方もむつかしくもふかくも申しめづらしき道理をも申す人は珍らしきことを申す人なれば仰せにはさようのかしこき思ひを具する人なれば仰せにはさようのかしこき思をばつぶさに念をとゞめすして彌陀の御恩ばかりを思へば念佛は口より出るなり、これを自然なりと也又他力なりと也申すと教へたまへり、かように只ほれ〴〵と念佛を申すは其姿は愚なり、珍らしきことを沙汰せず、同じくりことの南无阿彌陀佛〳〵と只稱名よろこぶばかりなればなり如是我聞

一この口は稱名のみよろこぶ姿こそ西岸に向ひ道を念

して一分二分づゝあゆみゆけばこの仰せの姿なりと承るなり、西岸に向へば何をか申すべきや命あらんかぎりは稱名念佛すべきものなり、穴賢〳〵ことはさてもおもひ合せられて候なり穴賢々々

一暫て此生をおわるまで退轉なく只淨土を以て期とすことは西岸に向ひたてまつるの途上の姿なりと信ずるものなり、これを命あらんかぎりはこも仰せ候ひしと信ずるものなり、これは相承大師の料簡なりと信ずるものなり佛說如是經釋無違

◎とふも妙なことのきはまり

一此ころ田舍の父爺婆々集まりて各々佛になると云ふて互に相談しておりますこれほど妙なことはない

○人間の中にても○大臣縣令郡長市長戸長などの等級もある、今の爺婆々文盲无智にして村長市長の資格もなき連中か○こはふことてつもない○大臣や參議を望むもおろか村長になりたいとの望みも出來ぬ連中か佛になると申合せておると云か○さあほんかしらぬ若ほんとならば滅法界なるとです

一妙なことはこれなり、これが不思議、これほど不思議は此世にはないことです

一こんな妙なことはいつごろより云ひ始めたるか○亦誰の云ひ始めてよりこんなことはふとてつもないこと

を云ひたてるやこ問へばこれは
大聖釋迦如來の云ひ始めたことゝ申します佛智不思議と云ふことはかねて承るか實に不思議ですなんと云ふても此一文不智者が佛になると信んずるこは妙なことのきはまりです

一世界の博學多き英雄豪傑こ云人にも佛になるこ云ふことは自心にもとめてもゆるすことはできぬ又佛に成たいとの望みをおこすことも及ばぬことなり○それに爺婆々が佛になりたいこの望みを起すとは實に妙なことの極まりです

一さあそう云たて佛に成りたいと云へばほんまに佛に成りたいにちがいない妙なことも○あればあるものです

一抑も佛と云ものはどんなものを佛こは云ふぞと問へば先づ佛こ云ふものは六神通を得て生死をはなれて安樂世界に住して衆生の苦を拔き樂を與ふるを佛こ云ふこれは佛の一分を云ふので佛の神通智のきはまり○こても云ふてもつくる樣なものではないこ云ひます

一そのような佛に此婆々連が百年もすぎて後になるこ云ふならばこもかくも今年中か今月中が今明日の中にも佛に成るが又長くて五年が十年が三十年五十年

の中には必ず佛になると云ふが、これがほんまなら、このような妙なことはない

一國會議員になろうと云てさへ、なみたいていのとぢやなられぬ、それに議員はおろか大臣はおろか、こはふことつもない○佛になることにとの婆々連が無遠慮にも佛に成りたいと望みをかけて中にはもはや佛に成ると決心して何に心なく安心して佛になることを待かねて居ると云が何んことのよふな妙なことはない

一そこで古しから此法を信ずる宗師方は此法を不思議の願力とも云ひ別意の本願とも云、頓速の法とも云、算用にも思案工風にもかゝらぬ道理も理屈も及ばぬい

かにも哲學理學者究理するも合點のゆく法にあらずと理外の理義外の義とも云ひます他力法なればなり

一されば古しより此法を信じ念佛したる宗師今何れに在すやたよりもなく音信もあらず成佛したやら成佛せさるやら少しもわからず知るに由なきなり

一かようにわからず知るに由なきに今にして信じて念佛して往生するぞと思ひとりて念佛申す人のあるは亦妙なことです

一佛說て云ふ信ずるも不可思議信ぜぬも不可思議とはこれなり

一こゝに妙な佛說あれともこれは略します、めつたにい

わぬ藥にもなり亦毒にもならんやとおもはれたれば止む

一まあ何でもあれ婆々連中の我を始め佛になると信ずるは妙なことです云ふてもおもふても聞ても見ても妙なことです不思議です

一我の如き老窮はひよつとすれば今明日の中にも佛になります、ながふて今月中か今年中か何れにしても遠からず佛に成ります、いよ〳〵佛になるとすればこんな妙なことはない、こんなに不思議なことは今の世で此一法の外には全く云ふものは一人もない、妙な法もあればあるものかな

一善導佛は前念に命たゆれば後念には彼國に生れて无爲の樂をうくと云へり、又淨業は内に薫し、慈光は外に攝す苦を脱し樂を受くることは一刹那の間とも云へり、これはみな信者の言なり

一こんなことは知りても信心のたしにもならず知らぬも信心の減にもならず

一これは信者の念佛を述て信心者の信心を堅固ならしむるの緣ともなるものとす、今こゝに記すも信心の足しにもならず、亦さはりともならず、信者のよろこびの緣ともならんかとおもはれます

一佛說て云信者は臨終命おはるとき滿世界火となるも

信心をば少しも妨ゆることなく往生すと説たまふなり

一何んでも法文を云ふても信心のことを云ふてもさはどにもめづらしくもおもはねどもほんまに佛になるとすれば、たとひ年若き人にても今より三十年五十年の中には必ず佛に成ることを決定するときは何と妙なことでめづらしきことです

一人々一生の中にしんぼうして位なら大臣高爵、富なら世界で一番となるの上はない、御文章にはいかにおもふさまになるもたゞ五十年百年のあひだのことなりそれも老少不定ときくときは云々とあります

一それに婆々連中の我を始め此わずかの年月の中に佛になるの決心をして今から樂しみて居るとは何んでもこんな妙なことはない云てもおもふても何にとも わからぬ妙なことです

一そふ云ふたて佛になると云へば他からならぬと云證こもなし佛になると云へばなるとするの外はないが何でも世界で妙なことがあれば不思議とか人智の及ばぬことをばあきれて面を見合てたまがることがある

一今日か明日か今年かをそし三五十年の中には佛になるといよ〳〵きはまるさすればどんなにたまがりてもたらぬことでかはを見合せてあきれてもたらぬことです

一佛說たまふ須彌山を一呑にして腹痛せず虛空を飛ぶ人あらば人は不思議と云はんか我說く法はそれよりも不思議なりとはんまにそれよりも不思議とおもはれます

一婆々連中の我々が近く佛になるとはそれよりも不思議です、あまりとはふとてつもないことですなー

一このゆへに佛法不思議と云は彌陀の弘誓になづけたりとは實に妙であります

一御文に宿善の人は自ら信を得るなりと、又无宿善の人

は當宗の家に生れても信心は得ぬと云ふいかにもさよふです何宗と云は人間のきはめたる名目です衆生不思議の心識に關係あるものにあらざればなり

一何宗かに宗と分派を立つるは人智の我慢に始まりたるまことに些細少狹云はゞ小兒の戯技分別の類とす

一无形の心識の生死の始めより宗派を分て生るものにあらざるは小兒でも辨解すればわかるものなり

一宗派は家にあるものにはあらず生れぬさきに定むべきものにも非ず

一佛說き玉ふ法は一にして无量の義あり故に受くるもの无量に分ると

一これは宿業によりて有緣の法に歸し同心一味の人に互に親近するものなり心識同じからず、ゆへに歸するところの法も不同なり

一宗師何宗と定めたるは姑く世間法によるものなり

一佛は始めより宗名を定めて說くものにあらず說終りて經名を告げ玉ふを例とす

一このゆへに何宗と云家の中に外宗者もあり亦无信者もあることこれなり

一これは世間沙汰なり止めて何でも此度佛になるこの一條なりこれがあまりに妙なことである云ても〳〵妙である

一佛の眞說を信順し宗師の決信及び正敎によればどふしても此度佛に成らねばならぬにきはまりましたいかにしてもうたがひを入るべき道たへてしもふたたまがらぬこれが又妙なことです

一宗師云道理文證明かなりこの仰せもこのことにやとおもはれます

一これはごに妙なことのできたに我もたまがらず人も一たまがるのを信心とは云はぬと云ふとは佛明かに說き宗師とまかにおしへられたることです

一さればたまがりても信心をますにもあらずたまがらぬでも信心のへるでもなしと云々これは佛說であります

一信ずる者はどうしても信んぜねばならぬようになりて信ずる者はどうしても佛にならねばならぬようにきはまる、これはどう云ふても不思議と云ふより外は云ひようのなきものなり

一宿善の人は自ら信を得るなりこあるはこれなり

一无宿善の機はこうしても信は得られぬと云ふこれをり

一釋迦は要門ひらきつゝ定散諸機をこしらへて正雜二行を方便しひとへに專修をすゝめしむと

一宿善に差等あり今世間法亦差等ありこす

一には无宿善の機は无信にして死するなり
二には定散にして死するなり
三には正雜二行にして死するなり
四には專修にして死するなり
一正雜にしておはるこはこれは雜行こし五種正行こして報謝の一途には念佛の外佛事ことゞく報謝こならへて修するこれを正雜二行こ云ふこれを方便こすこれに終るあり
一助正ならへて修するをはこれも雜修こ名づけたりこれなり
一正雜二行には別解別行の反對はおこらぬものなり

一五種の中念佛の一行これを報恩こす念佛の外を報謝こせず助業こし廢立を分明し念佛成佛是眞宗萬行諸善是假門こは念佛一行佛恩報謝こしてならべず專修專念に住すれば必ず別解の反對おこる專修念佛にあだをなす是なり
一いかに云ふてもいかなる御文を見ても宿善同じからざる人は信ぜず
一いかに廢立は佛說宗師の正敎こ云ふても聞いても見てもどふしても〳〵信ぜぬものなり亦自身に信じたいこ思ふても信ぜられぬものなりこれは妙なことですなあー

一信心をとりて安心をしたいと自心に求めても得られぬものあり、自心に求めても信んぜられぬものとすれば、信心をとり安心して念佛する身となるは亦妙なることです、これを佛智の不思議と申します、信心の智惠に入りてこそ佛恩報ずる身とはなれと申します

一自身に信じたいと求むる心起りても信心決定はできぬ、これを佛說て心と心とたゝかふと申します、何れも宿業と申します、自身に求めても得られぬ況んや人のすゝめをやそれに信ぜられたる人は不思議と云外あらず

一そこでたま〳〵行信をひば遠く宿緣をよろこべとは

この宿緣によると　佛語を信ずるゆへとみります

一何宗にも佛法を信じて未來世を期せんとする有緣の者同く心と心と戰ふものとす、中にも淨土眞宗有緣の我人大方心と心とたゝかふもの多し

一一つの心は信心を得て往生したいと求る一つの心はこれでは往生はできぬと退く、これを心と心と戰ふと申します宿善うすき人はこれでをはる人もありまし

よ

一宿善厚き人は善智識の人の敎によりて我か心のよしあしによて定まる信心にはあらず、信心とはうたがひなきを信心と云ふこのうたがひなき心は本願力によ

りあたへられたると宗師はおしへてくだされました

一釋迦如來富樓那に告玉ふ自ら法にすゝめばよろこぶと○又人のよろこばぬを見てよろこぶと○又同心の人を見てよろこぶと○又一句の法は千劫に說くもつきずとしてよろこぶと

一いかにもさよふでございます人の聞かぬを見て我のよろこびがおこります○又同心の人のできたるを見て○又よろこびがおこります○又一句の南无阿彌陀佛は萬劫に云ふても說ても語てもとう〳〵きはまりはないとしられてよろこびがおこります

一三千年の古へに佛は說て尊者に告たまふことを三千

欠

MISSING

一讀經中及び爾後意外のこと屢々ありて奇異のおもひあり思ひ合せられたれば于茲明治參拾四年八月十八日午前三時燈下に老眼を晒して之を記すものなり

是も亦念佛の助緣にもや○○

一信心決定の人は死るまで安心先きも亦安心

一無信者も死る日までは安心なり何にともなくさればいつ

未來世のみへぬばかりに安氣なり

信も不信も死ぬる日までは

一半信半疑決定心なきは一生中法中に在て安心の日は一日もなく死る日まで不安心にて死るは、いとも不便ならずや、さて宿業ときあれば仕方もなき佛力も及ばず

と佛は說れたり、あゝ何ぞ不仕合なるやこおもへばたま〳〵行信を得ば遠く宿緣を慶べ大きに所聞をよろこぶことは我ことなる哉何れも宿業の發見こあれば宿世見諸佛樂聽如是經宿世聞法今亦重て聞くこなり西路を指授せしかこも自障々々他のゆへなれば曠劫以來もいたづらにむなしくこそはすきにけれこ云ふても書てもつきず不思議の法なればなり、あゝおかしきものは我心なり穴賢

南無阿彌陀佛

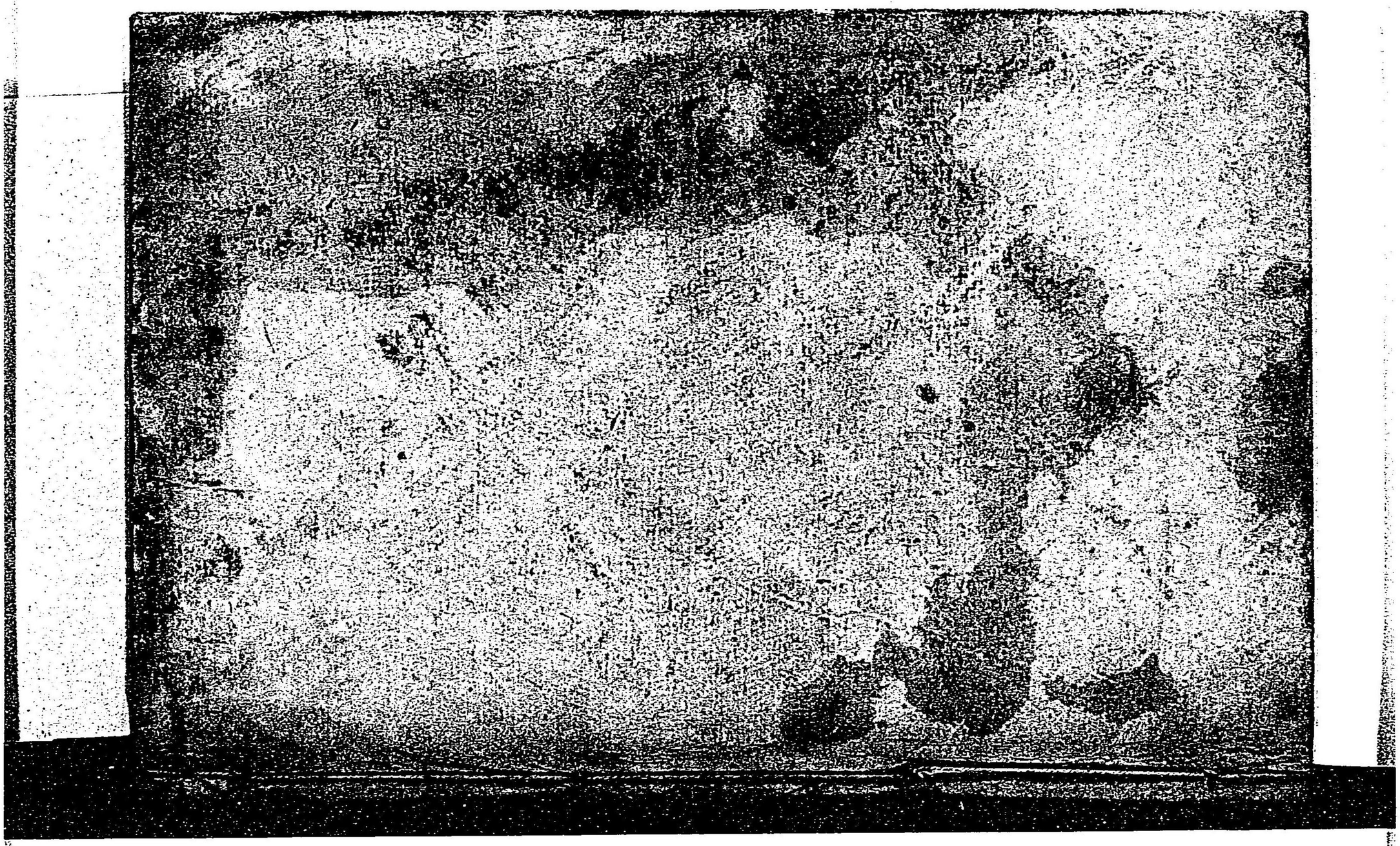
小川獨笑

經釋拔萃法語集　卷之一　終

明治三十五年六月三十日印刷
同　年七月廿五日發行

非賣品
不許翻刻轉載

編纂兼發行者　兵庫縣播磨國赤穗郡赤穗町四百七十八番地　宮本喜惣平

編纂兼發行者　兵庫縣播磨國赤穗郡鹽屋村五十貳番地　石野房吉

印刷所　大阪市南區安堂寺橋通り二丁目五十番邸　坂田吉太郎